

第四編

大

正

時

代

第一章 第一次世界大戦とパン関連産業

第一節 晴れのち曇りの世相

本編は第一次世界大戦が勃発した大正三年（一九一四）から、大正天皇が薨去された大正十五年（一九二六）十二月二十五日までのパンとその関連産業とその背景をなす一般社会状勢の推移に関する記録である。

イ、一般状勢
まずパン食の高度成長の支柱となつた一般社会状勢の推移を年次別に要約して列挙すると、あらまし以下の通りである。

大正三年——大戦勃発で経済界大動搖（輸出社絶・諸株暴落・米価暴騰）

大正四年——七年まで未曾有の大戦景気（諸株暴騰、貿易躍進、海運大需要、企業勃興、生産激増、巨大利潤実現）

大正五年——大戦景気、出超、インフレ、企業熱（紡績、綿布、生糸景気）

大正六年——下期より企業熱一段とたかまり、銀行、運輸、鉱業、化学機械、金属等の事業資本激増（ロシヤ革命）

大正七年——十一月十一日休戦、八月二日シベリヤ出兵宣言、八月三日から米騒動——十一月の休戦で諸株、染料、銑鉄、運賃等大暴落——ドイツ革命

大正八年——四月以降戦後景気、投機熱最高潮、百貨店続出
大正九年——三月十五日から戦後第一次反動恐慌、四月二十一日ニューヨーク株式一斉崩落、物価激落、貿易減退

大正十年——下期から中間景気に入るも、十月四日景気瓦壊、諸株、綿糸、期米一斉崩落

大正十一年——四月十七日から戦後第二次反動恐慌

大正十二年——九月一日関東大震災、震災恐慌、銀行集中化の起点、電

商業競争時代の起点

大正十三年——財界不況沈滯、自動車運送業の発達著し

大正十四年——利益率の低下づく、農林省新設、割期的大発電所統出

大正十五年——合理化による軽労働者の整理はじまる。関税大幅引上げ
十二月二十五日大正天皇没

以上の通りで大正時代の前半は成金統出の未曾有の好況時代であつたが大戦の末期から戦後にかけて異常な物価高になやまされた。そしてこれにつづいたものは第一次及び第二次の戦後反動恐慌と震災恐慌であった。この恐慌は昭和初頭まで続き、遂に国内不安を満州事変という対外戦争によつて打開するという悲劇的方向をたどつたのであるが、しかしこの大戦のためにパンは嗜好食から代用食へと飛躍することになった。

ロ、米価の推移

大正四年の深川正米相場平均は一石当り十三円七錢であつたが、七年にはそれが三十一円九十一錢となり、八年には四十五円九十九錢となつた。それが三十円七十九錢に下つたのは十年であつたが、十四年には再び四十一円六十五錢という高値となつた。最低値を一〇〇とすると、最高値は三五四であるが、このような米価の暴騰がもたらしたものは、パンの代用食運動であつた。

ハ、小麦粉相場の推移

開戦の年（大正三年）の小麦粉一袋あたりの相場は五円十六錢であつたが、大正八年にはそれが十円五十七錢まで暴騰した。それが八円二十四錢まで下つたのは大正十年であつたが、十四年には再び十円まで値上りしたこの期間の最低値を一〇〇とすると最高値は二〇五である。しかし米の最高値指数は三五四であるから、これと小麦粉の最高値を比較すると、小麦粉の方が一四九も割安である。食パンが内地米の代用食として脚光を浴びるに至つた経済的根拠はここにある。

二、精糖相場の推移

米と小麦粉の上げ足が早くなつたのは大正六年からであるが砂糖相場の

上げ足が早くなつたのは大正七年からであつた。大正三年の精糖百斤当り相場は二十円五十五銭であつたが、七年の相場は二十六円六十五銭であつて、その上げ幅はせまい。しかしそれが九年には四十四円三十八銭まで暴騰したが、十五年には二十三円八十四銭まで下落した。この期間の最低値（二年）を一〇〇とすると、最高値は一一七である。米三五四、小麦粉二〇五に対して砂糖の指数が一二七だということは、砂糖と粉の最高値がほぼ同じだつたということであるが、精糖の高値時代が比較的短かかつたことが、菓子や菓子パンの普及の大きなプラスとなつた。

ホ、パン企業の動向

未曾有の大戦景気は菓子・パンの飛躍的成長の原動力となつた。また天下を震撼した米騒動はパンを内地米の代用食として登場せしめる結果となつたが、陸軍がその北進戦略を押しすすめる必要上、率先して軍にパン食をとりいれると同時に、その普及推進にあたることになつたのも、普及上の大きなプラスとなつた。またドイツ軍俘虜の手によつて小型で能率的なドイツ窯普及の端緒が開かれたこと、田辺玄平が粗乾燥酵母を発明し、ついで生イーストが輸入されるようになつたこと、機械化製パン方式がとりあげられ、自動車配送方式が登場したことなどもパン業界の大きなプラスであつたが、実際にその成果が挙がつたのは昭和時代に入つてからであつた。なお自家培養のパン種からイースト時代へとかわつていつたために、封建的な徒弟制度がくずれ去ることになつたが、この現象が現実に進行したものも昭和時代に入つてからであつた。

第二節 戰争景気と戦後恐慌の実体

パン食の盛衰に決定的な影響を及ぼした一般社会状勢をまず年譜によつて示せば次の通りである。

一般社会状勢年譜（自大正三至同十五年）

年次別	月日	事項
大正三年	七、二八	第一次世界大戦勃発
	八、一三	日本対独宣戦布告
	八、二六	日本膠州湾封鎖を宣言
	一〇、六	日本ヤールト島占領
	一〇、一四	日本独領南洋諸島占領
	一一、七	日本独領青島占領
	八、一九	日本の参戦内定で経済界大動搖、大阪北浜銀行休業
	八、二〇	名古屋三銀行取付け
	九、一五	財界救済計画を発表
	一二、一八	東京駅開場
大正四年	一〇、三〇	大戦勃発で缶詰業活況
大正五年	一一、一九	大戦景気続く
大正六年	一二、二一	株式市場人氣沸騰
	一、一、二二	カフエー女給のエプロン姿出現
	四、六	大戦景気続く
	八、三〇	日本軍艦地中海にむけ出動
	一、一、七六	ロシヤ革命で皇帝退位
	一、一、七七	アメリカ、ドイツに宣戦
	一、一、七八	暴利取締りのため物価調節令公布
	一、一、七九	諸株絶崩れ
	一、一、八〇	ロシヤ革命でソヴェーツト政権誕生

一一一、五

ロシヤ休戦条約締結

栄養研究所開設（内務省）

理化学研究所成立（理研バン）

うどん、そば四銭。成金風

「今日は帝劇あすは三越」

畜産試験場ドイツ俘虜を使役してソーセージをつく

大正七年

大戰景気

ロシヤドイツと单独講和

日本シベリヤ出兵宣言

米騒動（越中富山の女房一揆を発端として一道三府三八県に拡大）

ドイツ革命でカイゼル皇帝退位

世界大戰終る

うどん、そば六銭

大阪市に簡易食堂、公設市場

流行語—投機熱

戦後景氣

大原社会問題研究所発足

続落の物価昂騰に転ずる

日本平和条約に署名ILOに加盟

大日本紡八時間労働制を採用

川崎造船八時間労働制採用

政府物価調節諸政策を決定公表

大型貨上げ争議統発

大正九年

一一一、三

高島屋、松屋、白木屋百貨店開業
労資協調会設立

期米、綿糸、生糸、諸株修落、破綻者続出

米国に先行して第一次反動恐慌（その後の慢性的恐慌の起点）

各地に銀行取付け

ニューヨーク株式一齊崩落

日本最初のメーデー（上野公園）

茂木合名破綻、銀行取付六七、支払停止二一

有力食品商社にも倒産多し

内務省社会局誕生

失業者統出—中央職業紹介所開設

栄養研究所官制公布

中間景気

安田善次郎暗殺

中間景気瓦壊、期米、綿糸、諸株一齊崩落

首相原敬東京駅頭で刺殺される

日英同盟廢棄決定

戦後第二次反動恐慌

諸株一齊崩落不況慢性化、銀行取付二九行

官厅土曜半ドン、暑休々止

健康保険法公布（十五年七月施行）

関東大震災、震災恐慌

電気業競争時代の起点

銀行業合同集中化の起点

關東大震災一死者九万九千、行方不明四万三千

京浜地区に戒嚴令公示

支払延期緊急勅令

暴利取締令公布

米穀輸入稅免除令公布

丸ビル竣工

震災を契機にアツバツパ（ワンピース）流行

財界沈滌

東京放送局開局

自動車運送業の発達著し

慶大食養研究所設置

大阪に円タク出現

大衆食堂の須田町食堂開業

関税撤廃でニンヒーフの輸入激増

利潤率低下

新編法成立

機械にて日本自動車組立工場出現

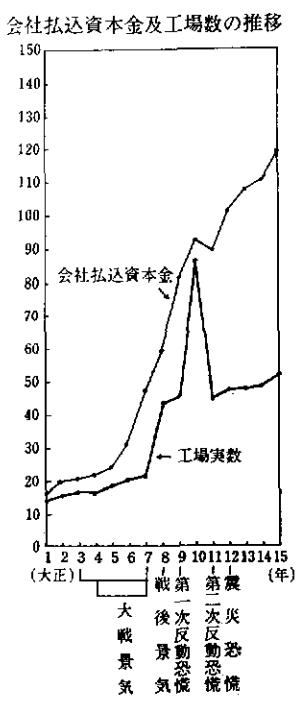
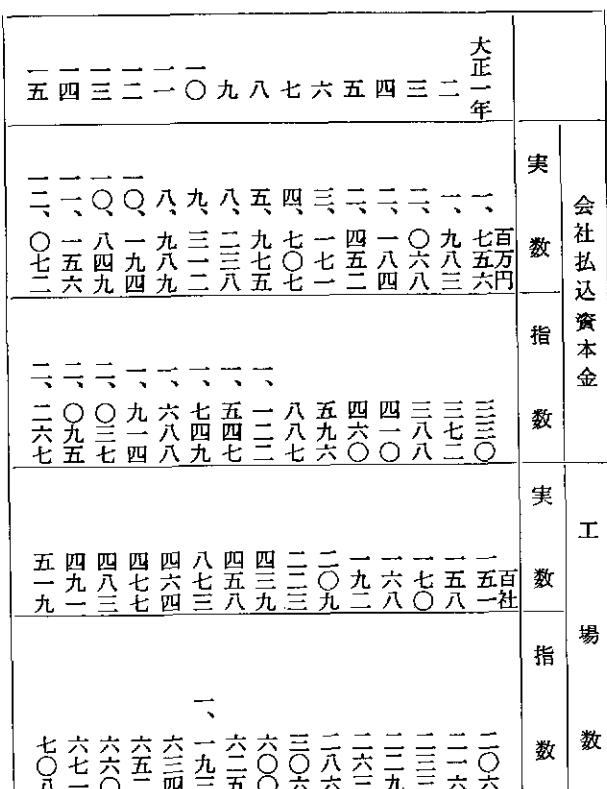
この年計劃の大発電所統出、電気とガスの廉売競争

西漢書

卷之三

大阪にゼネラルモータース組立工場出現

以上が一般状勢のあらましであるが、この波乱に満ちた大正時代を会社
払込資本金と工場数の推移の面からながめてみると、次表の通りである。



これでみるとよくわかるように、大正四年からはじまつた未曾有の大戦景気は、大正九年の四月七日からはじまつた第一次反動恐慌で総崩れになつた。それは大正十年に八万七千三百をかぞえた工場が翌年にはその五〇%に近い四万六千四百に激減していることからも充分に察することができる。しかしこのように工場数が激減したのは、第一次と第二次反動恐慌のために泡沫企業が消え去つたからであつて、この点は会社払込資本金が殆んど減つていないことによつて立証することができる。

こうして二度の戦後反動恐慌に耐えぬいた大企業はやがて独占支配体制をかためていつたのであるが、それはともかくとして未曾有の好景気は一般庶民層から農村にまである程度浸透していつた。この点は次に示す砂糖の需要の高度成長からうかがうことができる。

しかし経済の異常な成長発展は、やがて異常な物価高を誘発するに至つたのである。この矛盾の象徴的なあらわれは、大正七年の米そうどうであるが米価の狂騰は粉食の成長発展に拍車をかける役割を果した。この好況時代に菓子パンだけでなく食パンも大きく伸びる兆しをみせるに至つた所以

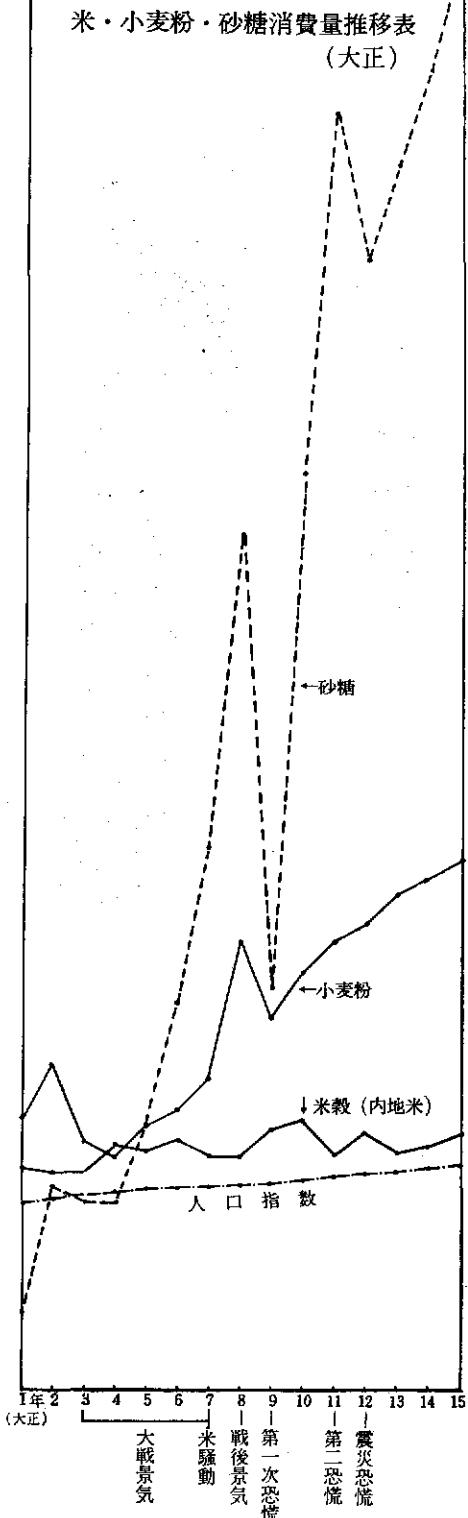
であるが、この間の事情を数字とグラフによつて示せばあらまし次の通りである。

このグラフをみると砂糖の消費が急上昇にうつたのは大正四年からであり、それが頂点に達したのは戦後景気はなやかなりし大正八年であった。しかし九年になると砂糖の消費は急転して下落しているが、これはいうまでもなく戦後の第二次反動恐慌によつて国民生活が大きくためつけられたからである。ただし直接の原因はこの時期に砂糖が暴騰したからであつて、この点は価格のグラフに示されている通りである。

なおこのような砂糖の消費の激減が菓子パンを含む菓子全体の需要の減少につながつていることはいうまでもない。

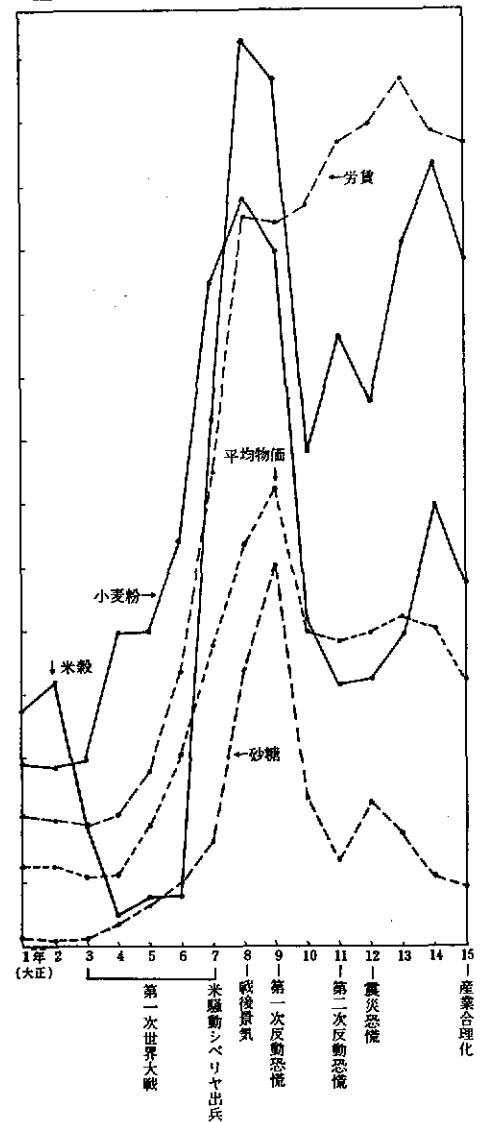
しかし第一次反動恐慌時代に激減した砂糖の需要は、翌十年から再び上升に転じた。その直接の原因が価格の暴落にあることは価格グラフに示されている通りである。

つぎに小麦粉の需要の推移をみると、これも砂糖と同じく大正四年から上昇に転じ、八年に頂点に達し、九年に至つて下降しているが、翌年から



物価と労賃の推移表（大正一〜五年）

大正期の物価・米小麦粉・砂糖・労賃の推移



一	二九四	六〇七	五八八三五・一四	三・六八	一五・三七
二	二九九	六一八	五四八三三・七六	三・七一	一九・一六
三	三一	六四六	六四五三八・五八	三・九八	二七・一七
四	三〇三	六一三	六九六四一・六五	四・八一	一四・四三
五	三五	六〇七	六三三三七・七七	四・三一	一三・八四

再び緩慢な上昇に転じてゐる。

いうまでもなく九年の下降はグラフにある通りの小麦粉の価格の暴騰と第一次反動恐慌の影響であり、十年からその需要が上向いてきたのはその価格の暴落によるものである。なおこのような価格の暴騰暴落が、そのまま食パンの盛衰につながつてゐることも、砂糖と菓子パンの関係と全く同じである。

内地米の需給の推移をみると、大正七・八年と十一年、十三年が不作である。ところが米価が暴騰したのは七、八、九年の三年間であつた。その原因が大戦景気のために農村の労働力が大量に都市に移動して農村労働力が減少したこと、農村で雑穀をたべていた人々が都市に移つて米食するようになつたことにあることは明らかであるが、いま一つは好景気のために米相場がはやつたこと、買いだめ売り惜しみが盛んであつたからでもある。

このような内地米の不足を緩和する役割を果したのは外米とメリケン粉であつたことはいうまでもないが、メリケン粉の大部分はメン類用であつてパン用ではなかつた。それは当パン用に充てられて輸入粉と内麦の比率を一見することによつてあきらかである。しかしこの第一次大戦景気がもたらした異常な物価高を一つのキッカケとして、パンの伸張率が次第にメンの伸張率を引きはなしていつたのである。

ここで特に指摘しなければならぬことは、物価高は何も食糧品だけにみられた現象ではなくて、全体を通じての共通の現象であつたということである。この点は食料品の騰落と平均物価の騰落が非常に近似した曲線を描いていることで、それは前掲のグラフを一見することによつて明らかであ

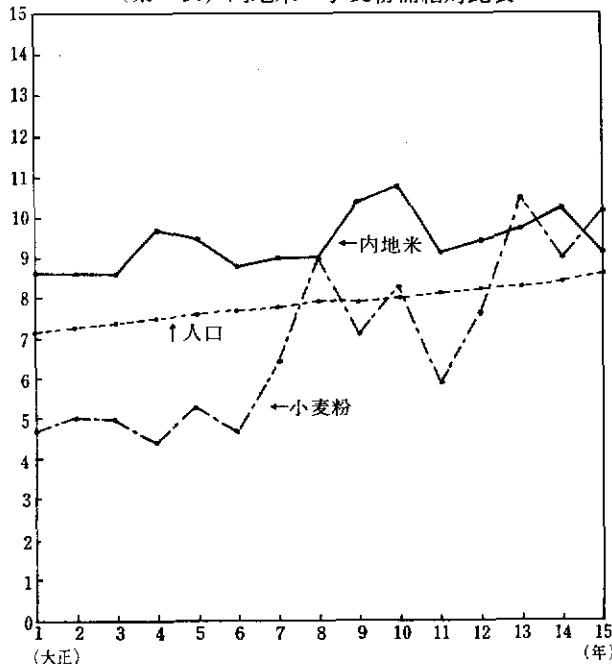
る。物価が上れば賃銀も上がる。この点もグラフに示されている通りであるが、ただ賃銀の上げ足よりも物価の上げ足の方が早かつた。大正七年の米はどうはそうした矛盾の爆発に外ならない。
なおこの大正時代の米と小麦粉の需給事情並びに価格の推移状況を指數に換算して対比すると次表の通りである。

内地人口、内地米、小麦粉の需給指數対比表

(昭九十二年は一〇〇)

年 次 别	人 口	内 地 米	小 麦 粉
大 正 元 年	七二	八六	五〇
二	七三	八六	四七
三	七四	九五	五〇
四	七五	九八	五三
五	七六	一〇〇	四七
六	七七	一〇一	六四
七	七八	九〇	七一
八	七九	八九	九〇
九	八〇	八八	八三
一〇	八一	八七	五九
一一	八二	八六	七六
一二	八三	八五	一〇二
一三	八四	九一	一〇一
一四	八五	九四	九七
一五	八六	九七	九一
一六	八七	九九	一〇二
一七	八八	一〇〇	一〇〇
一八	八九	一〇一	一〇一
一九	九〇	一〇二	一〇二
二〇	九一	一〇三	一〇三
二一	九二	一〇四	一〇四
二二	九三	一〇五	一〇五
二三	九四	一〇六	一〇六
二四	九五	一〇七	一〇七
二五	九六	一〇八	一〇八
二六	九七	一〇九	一〇九
二七	九八	一一〇	一一〇
二八	九九	一一一	一一一
二九	一〇〇	一一二	一一二
三〇	一〇一	一一三	一一三
三一	一〇二	一一四	一一四
三二	一〇三	一一五	一一五
三三	一〇四	一一六	一一六
三四	一〇五	一一七	一一七
三五	一〇六	一一八	一一八
三六	一〇七	一一九	一一九
三七	一〇八	一一一〇	一一一〇
三八	一〇九	一一一	一一一
三九	一一〇	一一一	一一一
四〇	一一一	一一一	一一一
四一	一一二	一一一	一一一
四二	一一三	一一一	一一一
四三	一一四	一一一	一一一
四四	一一五	一一一	一一一
四五	一一六	一一一	一一一
四五六	一一七	一一一	一一一
四五七	一一八	一一一	一一一
四五八	一一九	一一一	一一一
四五九	一一一〇	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一	一一一	一一一
四五四	一一一	一一一	一一一
四五五	一一一	一一一	一一一
四五六	一一一	一一一	一一一
四五七	一一一	一一一	一一一
四五八	一一一	一一一	一一一
四五九	一一一	一一一	一一一
四五一	一一一	一一一	一一一
四五二	一一一	一一一	一一一
四五三	一一一		

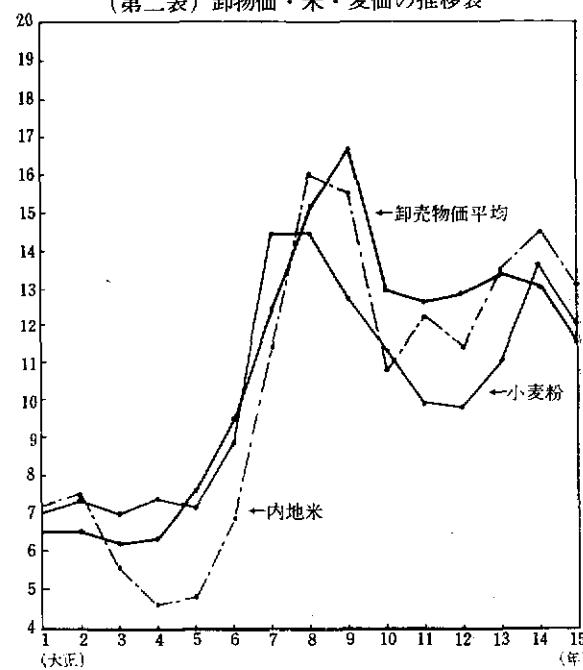
(第一表) 内地米・小麦粉需給対比表



大正

一一一
五四三二一〇九八七六五四三
年年年年年年年年年年年年一一一
二三三三二二二六七一五二二九五
五〇三八六九七八六六一六五八
七五六九七六八六六一六五八一一一
三四四一三一〇五四六〇一三一
三五四一四一三一七一五七一七
三三六〇二八七五六七七七四一一一
一二一九九三八五四五九二七
九七〇八九三八五四五九二七四〇

(第二表) 卸物価・米・麦価の推移表



これでみると内地米の供給率は一貫して人口の増加率を上回っているが、いまでもなくこれは国民の生活水準が上升して次第に雑穀メシや麦メシ食率が低下していくことを示すものである。これに対して小麦粉の指数が人口指数を上回ったのは米そうどうの翌年にあたる大正八年であった。そして米食の増加率を上回ったのは大正十三年であった。このような現象がおこつたのは小麦粉の対米比価が安かつたからで、この点はグラフ第二表に示されている通りである。

第三節 大戦景気の規模

これから年次別に一般状勢に言及するが、明治天皇が崩御あそばされたのは明治四十五年の七月三十日前零時四十三分であり、乃木大将夫妻が殉死したのは御大喪(ごたいそう)当日の九月十三日午後八時であつた。

それはともかくとして、こうして明治時代は終りを告げ世は大正時代となつたのであるが、明治天皇逝去からまる二年後の大正三年七月三十日第一次世界大戦の第一報がとどいた。

オーストリヤがセルビヤに宣戦布告したのは七月二十八日だつたが、それから二日後の明治天皇逝去の思い出の日にこのニュースは新聞を通じて一般に知れ亘つた。さあたいへん。

続いて墺国（オリエク）側に立つたトイツが、ロシヤとフランスに宣戦する。するとこんどはイギリスがロシヤ、フランス側に立つて、トイツに宣戦した。当時は日英軍事同盟がむすばれていたので、英國からその旨が正式に通報されたが、日本が英・仏・露の側に立つて対独宣戦の布告を発し、このは翌八月の二十三日であつた。

しかし日本の参戦が内定すると、全日本の経済界はたちまち大混乱に陥つた。そうなると輸出も輸入も杜絶してたいへんになるとみたからである。宣戦布告に先立つこと四日の八月十九日に早くも大阪北浜銀行の取りつけさわぎがおこつたのはそうした不安が一般市民の間にも浸透していたことを示すものであるが、翌二十日には名古屋の三銀行に取り付けさわぎがおこつた。成り行きを心配した政府が、財界救済プランを発表したのは翌九月の十五日であつたが、軍部はこうした混乱を横目みて、さつさと作戦行動をすすめていった。

八月二十六日に独領青島の大玄関たる膠州湾(こうしゅうわん)の封鎖を宣言した我国は、十月六日に南太平洋の独領ヤールト島を占領し、同月十四日には独領の南洋諸島を悉く占領した。そして十一月七日にはドイツの東洋進出の根據地となつていた青島を陥し入れた。

青島陥落の報を報をつたえた十一月八日の「大阪毎日」はその社説において曰く。

「国交断絶してより七十五日、海軍は直ちに青島を封鎖し、陸軍は九月一日をもつて竜口に上陸す。(略)堅忍不拔よく攻城の法を進め、進戦二日にして敵の防禦線を奪取し、本攻一週目にして直ちに青島を攻略し終ら

青島攻略戦の決算

◇ 独軍の損害 戰死二〇〇人 負傷五五〇人 病死五十人

◆◆日本軍の損害 戦死七三人 負傷三四〇人

◇ 狙軍作戦 極めて一貫且三四〇六八〇六官等一二二二の俘虜は内地に後送されて各地で分散収容されたが、この俘虜たる

で各地にドイツ窯が構築され、それが小型ベーカリー統出のキツカケをつくりたいきさつにはあとで詳しく言及する。

さで開戦前後の経済界の大浪舌に沙汰はおちへき 翌年から木曾有の力 戰景気がやつてきた。それはこの大戰が永びくということがわかつたからである。

大戦の勝敗が容易に決しなければ、交戦各国はアジアの市場の放棄を余儀なくされるし、日本に兵器や軍需品を必ず大量に注文することになる。そうなつたら日本は列強が放棄した東洋市場を独占してその空白を埋めることになるばかりでなく、連合国の大戦争兵器、弾薬、軍需品を大量生産して邊境手に粟の大儲けをすることができる。そればかりでなく、列国からの物資の輸入が杜絶すれば、国内工業をおこして自給自足しなければならないが、そのためには新しい工業もおこる。

これはすべて理屈であるが、事態はその理屈通り進んでいた。そして日本と中途から参戦したアメリカは、この大戦でボロ儲けをする結果になつたのである。

日本がこの大戦でまず第一に引受けたのは軍用缶詰であつた。腹が減つてはいくさができぬからであるが、大正四年の下半期から戦争景気は本格的となり、それは終戦翌々年の大正九年春までつづいた。経済学者土屋

「武の功に由よりずんばあらず」と。
いさざか大げさな論説であるが、実際は本国から孤立した独軍を攻略したのだから大戦闘を開いたわけではない。それはこのいくさの結果ことじよしそうつる。

雄氏は当時の好況の実体に次の通り言及しておられる。

「大正四年から九年までの六カ年間に新設拡張された事業の資本金高は実に百四十三億七千百余万円の巨額に達しているのであつて、これを明治以来大正二年までの四十余年間に累積した戦前の会社払込資本金または出資金の合計にくらべると非常な相違である。明治維新から大正二年末までにおける資本金額は十九億八千三百万円。これに対しこの僅か六年間において百四十三億七千百余万円という数字であるから非常な急発展であつてこの六年間の新設拡張高が明治維新から大正二年末までのにくらべて実に七倍余に達するのである。(略)

その発展が貿易および貿易外収支の上に如何に現れたかをみると、未曾有の出超であり、収入超過であつた。かくて正貨が未曾有の増大をみたのである。

大正三年の輸出六億一千三百余万円が大正八年には二十一億八千余万円となり、貿易外収支は戦前の支払超過が受取超過になり、大正七年には五億七千五百余万円の受取超過となつた。また正貨の現在高をみると、大正三年の三億四千四百万円が大正九年には二十一億七千八百万円になつてゐる。かくてながく債務国であつた我が國が一転して米国とならんと債権国になつたのである」と。

まったく要を得た説明で、これに付け加えるべき何ものもない。

第四節 戰争景氣と食生活の洋風化

こうして我国には戦成金なるものが雨後の筈のことく続出したのであるが、成金とは将棋の歩が敵地にのりこむと一躍金に「成る」ことにたとえたことばで、日露戦争後の好況時代に生れた新語である。金になつても所詮は歩。人々は軽蔑と嘲笑の意味をこめて俄かお大尽を成金と呼んだのであるが、玄関が暗いからといって札を燃やして靴をさがさせた成金のはなし、札をもやして料理をつくらせた成金のはなしなどが当時の世間の話題となつた。神戸の船成金内田信也が、たまたま乗り合せた列車が転覆

事故をおこしてその下敷きになつたとき「おれは神戸の内田だ！金ならいへども出すから助けてくれ！」と叫んだというゴシップは全国的悪名をはせたものである。

戦争がはじまつたとき内田は四千五百屯の船一隻を契約して神戸で小さな船会社をやつていた。それが翌々年の大正五年には十六隻の船持ちとなり、六十割配当という空前の記録をつくつて世間をアツといわせたものであるが、その内田は成金礼讃のことばを次の通り綴つている。

「神戸の船舶界が東洋一の市場であつたことは戦前のことと、今日ではロンドンにつぐ世界の市場となつたのである。交戦各国の船舶は悉く御用船となつてゐるから、ロンドンに船がなくなるとすぐにわが神戸にむかつたので、ことばをかえていうと神戸が全体として成金になつたのである。こんなときにはいたずらに国内のことなど考えずに大いに外国を相手に金もうけをなし、国民こそつて成金になるよう奮斗するに限る」と。

これは内田の有名な成金哲学の骨格であるが、たしかに彼のいう通り労働者にまで好景気のおこぼれが及んだのである。

工場がつぎつぎに建てられ、人手はいくらあつても足りなかつた。それは大正三年現在の職工五人以上の工場三万二千が大正八年には四万四千をこえ、工員数も一〇九万人が一七八万人に激増したことからも察するに難くないが、特に一人前の腕を持つた工員は引張り廻で、その収入も多かつた。そんなわけで熟練工の中には女郎を買いつりにして毎日遊廓から工場へかようものもめずらしくはなかつた。従つてボロ儲けの旗頭といわれた兵器の職工などはカフェーやレストランで、恰も福の神のように大歓迎された。そしてこのような氣ちがい景気は消費都市の京都にまでも及んだのである。

当時小学生だつた松田道雄(開業医—評論家)は大正四年秋の御大典祝賀當時の京都の模様に次の通り言及している。

「大正三年にはじまつた世界大戦に、日本は自らを少しの危険にもさらさないで、ばくだいな戦争利得者となつた。その余波が西京にも及んで、いたるところに成金というものが現われた。間屋筋は軒並みに改築をした岡崎や嵯峨に別荘をつくつたりした。また家の中に洋館と称するシャンデリヤを天井からつるしてリノリュームをひき、ピカピカの腰板のある部屋をつくつて洋画の額をかけた。(略) 大正四年十一月の大正天皇御即位のご大典には京中の市民は町をあげて熱狂した。この熱狂を式典への共感だけで説明するのは正しくない。それはかつて経験したことのない急速な異常な繁栄のよろこびの爆発的な表現というべきである。「えらいこつちやパンザイパンザイ」というあの単純な阿波(あわ)おどりのリズムによつてしまふ自分によろこびを現わせなかつたということは、その繁栄が京都の文化の正常な発達とつながつていなかつたということである」と。

京都の二条離宮前に店をもつていた進々堂が、この御大典を機会に盛運にのり、やがて京都の代表的パン屋に成長したことは業界の語り草になつてゐるが、「今日は帝劇、あすは三越」ということばが流行語になつたのはそれから二年後の大正六年であつた。

こうした世相の変遷が衣食住の洋風化に拍車をかけたことはいうまでもないが、そのもつとも象徴的な事実の一つに森永ミルクキヤラメルの爆発的な売れ行きがある。

森永がキヤラメルを売り出したのは日露戦争前であつたが、当時はそのミルク臭いところが敬遠されてさつぱり売れなかつた。それに売れ足がついたのは大戦がはじまつた大正三年の秋から翌年の春へかけての連續三回の売り出し宣伝以後であつたが、「森永五十五年史」は当時の模様に次の通り言及している。

「正に時機はきた。キヤラメルの売上げは月を逐つてあがり、たちまち菓子店のドル箱となつた。そして大正三年の秋から四年の春にかけて連續三回の売り出しを行つたが、全国各地とも熱狂的な歓迎で、総額十三万缶を売り切り、為に同期における売上高百五十一万円余にのぼり業界を驚倒

せしめた。ボケット用キヤラメルの好人気と勢を得た当社は、宣伝自動車隊を編成して特約店の所在地を順次訪問して、町から町をかけまわりつゝ車上から無数のキヤラメル、名入りの玩具紙飛行機をとばし、全日本の大人と学生や子供の人気をさらつた。ついで活動写真会(森永デー)を主要都市で開催し、キヤラメル愛用者を招待してその衛生的大量生産の実況を観覧(かんかく)せしめ、多大の興味と感銘を与えた。この大宣伝に当つては社長はじめ社員総出で数班に分れ、昼夜を分たぬ大奮斗を続けたのであつた。その結果キヤラメルの完全な大衆化に成功してその名称は遂に森永の代名詞となるに至つた」と。

こうしてハタクさい、ミルク臭い、西洋くさいという欠点がたちまちその長所として認められる時代が來たのである。当時評判になつた電車内広告ポスターには「いよいよミルクキヤラメルの時代は来れり!、天二物を与えんば僕はミルクキヤラメルを取るよ!」と記してあつた。

この森永の大成功をみた財界が、相次いで東京菓子、大正製菓などの大企業をおこし、後年これが明治製菓となつて森永の一大敵国を形成するに至つたのであるが、パン業界もまたこの好況のおかげで未曾有の好景気を謳歌したのである。

大正五年に東京神田猿楽町の木村家パン店に入店した尾池竜明氏は、當時を偲んでこう語つてゐる。

「わがパン界も俄に活氣つき、その業に従うもの、あるじも職人も、老も若きも均しく欣喜雀躍(きんきじやくやく)するの感があつた。当時の東京のパン業界は食パン卸と菓子パン屋に区分されていたが、大体において食パン卸三十軒、菓子パン屋二百四十五軒といつたところであつた。ところが東京市内の人口の増加は異常な勢いで、為に既存の製パン業者の全能力をフルに發揮してもとうてい顧客の購買力を充分に満たし得ないだらうと推定されたほどであつた。かかる状勢下に在つて吾も人も製パン業を志し、その増加のはげしさは正に雨後の筈の如き觀があつたのである」と。しかしそうした好況はやがて異常な物価騰貴をもたらす原因となり、遂に

に大正七年の米そらどうとなつたのであるが、このさわぎで食パンが代用食として脚光を浴びることになつたのだから、これは正に奇しき因縁といわなくてはならないであろう。

第五節 米騒動の遠因・近因

これから物価高、米騒動などに言及することになるので、そのまえにまず米穀関係の年譜を示し、これについて若干言及するが、本題である生バソの年譜はそのあとでこれを紹介してさらに詳しく言及する。

年次別	月日	事項
大正三年	七、二八	第一次世界大戦はじまる。
大正四年	八、二一	大戦のため輸出杜絶し米価暴騰
大正五年	九、一〇、二一	七年まで未曾有の大戦景気 米価調節に關する件公布
大正六年	五、七八、三〇、二一	警視庁不正白米商を検挙 米価大暴落(当限十円八六錢) 米価調節調査会設置
	九、八	大戦景気
	五、七	米価調節調査会關係諸案を可決
	九、八	戰争景氣
	五、七	歐州大戦講和説の為米価昂騰
	八、三〇	期米昇騰し東京先物二四円台突破
	二一	暴利取締りの為物価調節令公布
	二	期米大暴騰東京市場休会

大正七年

一、二六	期米大暴落	米価暴騰
一、二四	台湾米移出令公布	外米管理令公布
一、二二	世界大戦終了	鮮米移入促進を発表
一、二一	米税輸入税減免	米価乱騰で各取引所立会中止 シベリヤ出兵宣言
九、三〇	米騒動の収監者六千三百人突破	富山県の女房一揆を口火として、米騒動全国に波及する。
八、一九	農商務省米の買占者に警告	農商務省米の買占者に警告
九、二三	天皇人民救濟費として金三百万円を下賜	天皇人民救濟費として金三百万円を下賜
九、二九	原政友会内閣成立	米騒動の新聞記事禁止、鎮圧のため軍隊を出動
九、三〇	米騒動の収監者六千三百人突破	農商務省朝鮮米の廉売開始
一〇、二〇	外米百万石の輸入決定	緊急勅令で穀物收用令を公布
一一、一二	この年大阪市が公設市場及び簡易食堂を設置	農商務省米の買占者に再び警告(白米一升一円突破)
一一、一二	職後景気	米騒動の責を負い寺内内閣総辞職

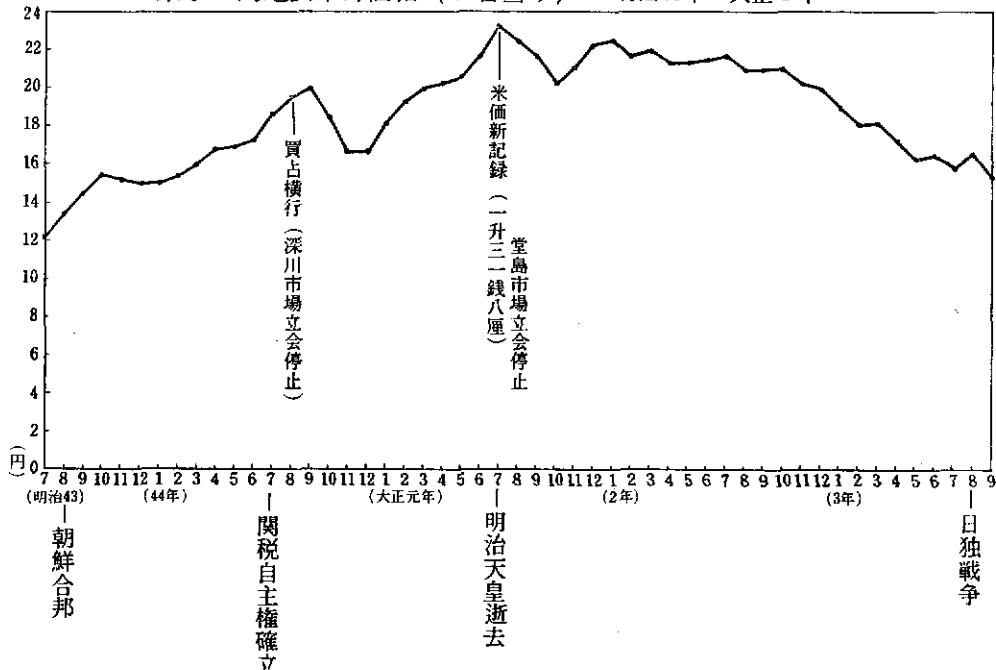
三、二	米価調節の為、小麦及小麦粉関税減免
四、一〇	この日から統落の物価暴騰に転ずる
五	米、小麦粉急騰にうつる
七、二二	農商務省節米を通牒
八	白米小売価格暴騰
一〇	政府物価調節応急策を発表
七、二三	糧食研究会発足
八	第一次戦後反動恐慌
一	深川米相場の頂点
四、四、七	期米、綿糸、生糸、諸株暴落破綻者続出する
四、四、八	ニューヨーク株式一斉暴落
二	麦価暴落の起点
一	中間景気
四、五、一	米穀法公布即日施行
四、五、七	農商務省食糧局を設置
一四	米価狂騰
一〇、四	景気瓦壊、期米、綿糸、諸株一斉崩落
一一	米穀輸入税免除（翌年十月まで）
一二	政府保有米下発表で東京期米暴落、市場混亂して立会停止
一三	第二次戦後反動恐慌
一四	堂島米穀取引所立会停止、東京、京都、神戸取引所も停止
大正十一年	
大正九年	
大正十年	

以上がこの大正時代の米をめぐる諸問題の年譜であるが、実際に米の値上がりが社会問題としてさわがれるようになつたのは大正六年十一月のロシア革命ごろからであつた。そのころから早い上げ足に転じた米価は、大正九年の一月まで上りつけたのであるが、その上げ幅が如何に大きかつたかは大正五年九月現在の石当り米価十三円五十銭が、大正九年一月には五十四円六十三銭になつたことからも察することができよう。いま試みに米騒動前後の米価の推移をグラフとして示そう。

何しろ一石当り十三円五十銭（深川市場）の米価が五十四円六十銭になつたということは四・二倍に騰貴したということである。狂騰というの外ないがなぜこのようく狂騰したかについてはこれから言及することにしてまず米騒動そのものに言及すると、さわぎがおこつたのは大戦が終末に近付いた大正七年の七月二十二日であつたが、それからおよそ七十五日間、日本全国一道三府四十三県に暴動がおこり、全人口のおよそ四分の一がこのさわぎにまきこまれた。蜂起の重大化したところは三十三市、百四町、九十七ヶ村で、軍隊が出動したところだけでも十七県、六十市町村に達した。警察力ではどうにもならなかつたので遂に軍隊の出動となつたのであるがこの事件で起訴されたものは七千七百八人であり、懲役刑に処せられたものは二千六百四十五人、うち七人は無期徒刑であつた。

四、一七	諸株一斉崩落、不況慢化
七、二九	米価大暴騰
十、一	震災対策として米穀輸入税免除令公布され、台灣蓬萊米出廻る
九、二一	大麦、小麦、大豆輸入税も減免
六	米価暴落（政府の米穀調節声明のため）
四、一	農商務省廃止、商工省及び農林省設置
大正十三年	
大正十四年	
大正十二年	

東京の内地玄米卸価格（1石当り）一明治43年～大正3年一



問題はことここに至つた原因如何であるが、その原因の一つは米の直接生産費、農業雇人の賃金や肥料代が好景気のために値上りしたことである。しかしそれよりも大きな理由は戦争中の工鉱業の大発展で、農村の人口が急激に都市に集中して、米の消費が激増したことである。このほかに農村の景気もよくなつて米をたべる農民があえたことや、酒造米の消費が増加したこともある。

こうして消費は急増したが、米の供給がそれに追付かなかつた。それは大正六年産米の五千八百四十万石にたいして七年と八年はそれよりも四百万石も少い五千四百万石台に止まつたことによつて知ることができる。その生産減退の一因が農業労働人口の都市への大移動にあつたことはいうまでもない。

ところが時の寺内内閣は、米価の暴騰は相場師の投機に原因があるのだといつて奸商取締令を発動して不正米商人を若干検挙した程度で殆んど効果的措置をとらなかつた。

しかし米価騰貴の原因は投機だけではなかつたから、奸商取締令の発動で一度落付いた米価もまたあがりだした。そこで政府は外米の移入促進をねらつた外米管理令を公布したが、その外米の輸入は三井物産とか鈴木商店などの特権的政商に独占されていたので、彼等は先高を見越して輸入した外米を仲々市場に出そうとなかつた。それを大量に放出したら買い溜めた内地米の値下り必至だからである。

さらに投機をはげしくしたのはシベリヤ出兵を見こした軍用米の思惑の盛行であった。何れシベリヤに出兵するとなると、必ず大掛りな軍用米の買付が行われる。そうなれば米価は一層奔騰するにきまつてゐる。そんなわけで外米管理令の公布にも拘らず、米価は暴騰につぐ暴騰であつた。こうして遂にシベリヤ出兵宣言の翌日から本格的な米騒動の火ぶたが切られたのであるが、一般民衆にとつて米の値上りだけが問題ではなかつた。なぜならばあらゆる物価が暴騰して生活難がひどくなつていたからである。この点からいって米騒動は実は物価全体の値上りムードにたいする反撥だ

つたということもできよう。

この点は大正三年の菓子職の平均賃金十三円が、大正七年には十六円五十銭に上つただけという点からも察するに難くない。これは三割七分の値上がりということであるが、米の値段をみると、大正三年に十六円十三銭だったのが、七年には三十一円七十五銭になつているからこの方は十割強の値上りであり平均物価の値上りもほぼこれと同じだからである。

第六節 天下を震撼した米騒動

前掲のグラフでみると米価と物価が大体同じ歩調をとつていたのは大正六年の七月までである。したがつて米価の上げ足が一般物価より早くなつたのは翌八月以降であるが、十月一日に京浜地方を大型台風がおそつた。

それには二個中隊の軍隊が出動して救援にあつたほどのさわぎがあつたが、この台風によつて米価が一挙に暴騰した。収穫期の稻の被害が甚だだらうという推測からであつたが、この状勢をうれえた道徳経済合一説の沢栄一（當時男爵）は「天下の富豪は満てる倉庫をひらいて罹災民を救援せよ」と全国の資産家に呼びかけた。また新聞は「世に俠商なきか」とこの渋沢の呼びかけを支援したが一向ききめがない。そこで台風から五日後の十月六日警視庁は、売り惜しみ買いためをする悪徳商人取締りのための「奸商取締令」を発動したのである。その結果人心もややおちつき、翌七年三月になると米価は暴落した。しかし翌四月から再び騰勢に転じ、七月に入るとその騰勢は一段とほげしさを加えていった。それはシベリヤ出兵による軍用米の買付近しという思惑と、瑞境期の米不足が直接の原因であつたが、これを憂慮した政府は七月十八日付をもつて朝鮮米の移入を促進する旨を声明した。しかしそうしたかけごえだけで値上りを防止することはできなかつた。

鮮米移入促進声明の出た十八日の国民新聞をみると、東京深川廻米（かいまい）組合の書記がこう語つている。

「いつもなら市場としては高値をむしろ歓迎するのだが、こう空飛な高

値になるとかえつておそろしい位だ」と。

東京では七月三日を期して警察官を一挙に四割強増員しているが、これはいづれさわぎがおこるだらうと見越したからに外ならない。何しろ春には一升二十銭だつた米が夏には四十五銭になり、五十銭になり、さらに五十五銭にもなつたからである。

大阪でも事態は同様であつた。大阪正米相場では七月一日に石当り二十九円だつたのが、八月一日には三十六円十銭という相場を出した。一日以降はさらに暴騰をつけ、三日三十八円二十銭、五日四十円五十銭、七日四十一円といわゆる発狂相場を出した。こうして一番安い米でも一升が五十銭を突破したのである。

かくして八月二日を迎えたのであるが、この日寺内内閣は「アメリカの提議によりシベリヤのチエツコスロバキヤ軍を救う」旨の出兵宣言を行つた。こうして日本は七万余人の兵隊をシベリヤにさしむけ、三カ月以内にバイカル以来のシベリヤ全土を占領したのであるが、この出兵宣言は米価の狂騰だけでなく、その売り惜しみと買いために拍車をかけたのである。その結果翌三日には富山県の西水橋町で女房一撥がおこつた。

このさわぎとその後のうごきについて「日本の百年」（筑摩書房）は次の如く記している。

「この日海岸に集つた富山県中新川郡西水橋町の約百七八十人の女たちは、米屋や資産家をおそつて米の安売りを要求した。このデモは「女一揆おこる」「女房連の一揆」として地元紙だけでなく、大毎、大朝でも報道された。そしてその翌日さわぎは隣町にも波及し、この日から六日にかけて東西水橋、魚津、生地、滑川、泊などで数十人から数千人のデモが行われ、警察とも衝突した。さわぎは忽ち全国の都市、漁村、農村、工場、鉱山などいたるところに拡がり、ほげしさを加えていった」と。

九日には京都、名古屋、その他の都市でさわぎがおこつたが、京都ではその鎮圧のために軍隊が出動した」井上清著「日本近代史」（合同出版社）はその後のさわぎを次の通り要約している。

「富山県下の蜂起を米騒動の第一段階とすれば、京都、名古屋の蜂起から八月十五日までが第二段階である。騒動は近畿、山陽、四国、九州、北陸、関東、東海、東北の大中の都市に一斉に発展した。大阪は十一日から十三日まで、神戸は十二日から十四日まで、奈良は十四日、和歌山は十三日（以上近畿）岡山は十三・四日、広島は十一・三日（以上山陽）高松は十四日、松山、高知は十五・六日（以上四国）門司は十五・六日（以上九州）金沢は十一日、福井は十三日（以上北陸）静岡は十三・四日、東京は十三日から十五日まで、横浜は十六・七日、甲府は十五日（以上東海及び関東）福島は十三・四日、仙台は十四・五日（以上東北）に騒動がおこつた。この一週間が米そうどうの最も集中した時期で、上記の大都市のほか、各府県のいくつかの都市に騒動があり、また郡部でも十三日から至るところできわぎがおこりはじめた。大阪、神戸、岡山の事件は特に規模でまた激烈であつた。（略）

第二段階での大中都市の騒動では、民衆の攻撃の対象は、はじめは米の売り惜しみをする小売商であり、そこで米の安売りを要求した。さらには米問屋へ行き名古屋、東京のようにもつとも進んだ場合は米の取引所を攻撃した。また高利貸、富豪の邸をうちこわしたことも多い。これらの攻撃は必然的に警察と衝突する。そこで巡査派出所はたいてい焼かれ、またこわされた。さらに民衆はしばしば警察本署をおそつた。警察は民衆によつて殆んどまひさせられた。（略）

吳では十四日の夜海軍工廠の労働者を主とする三万人が、市内の街灯を消し闇黒の中で米屋と富豪をうちこわし、水兵團と数時間に亘り殆んど市街戦のような衝突を演じ、民衆側に即死三名、重傷四百名を出し、水兵團に将校一名と水兵十五名の負傷者をだした。（略）首都の東京に（十三・五日）米騒動が波及したことは政府をあらえあがらせた。十三日天皇の名で三百万円の細民救濟費が出され、政府は一千円を支出し、三井、三菱その他の財閥からも合計数百万円が出された。各県でも地方費やその地の富豪の寄付が大急ぎで集められた。これらの金で当局は外米の安売りをや

り人心をなだめるのにつとめた。一方政府は十四日新聞の米騒動の報道を禁止した。これにたいして全国の新聞社が社長を先頭に立てて一斉に言論報道の自由をまもるためにたたかつた。大阪朝日は政府がこのような暴虐をほしいままにすれば「白虹日（はくこうひ）を貫き金剛無欠（きんごうむけつ）」の國体にひびがはいるであろう」とさえ書いた。（略）

八月十六日から騒動は農村及び地方都市と炭鉱にひろがり、軍隊及び警察と民衆とのきわめて尖鋭深刻な流血の衝突がおこつた。十六日以後が第三段階である。（略）

炭鉱の暴動を最後としてさしもの米そうどうも終つた。魚津町の小さな事件から明治炭坑の暴動までおよそ五十七日間日本全国一道三府三十四県に暴動がおこり、そのほかの県にも群衆行動のおこらないところは一県もなく、全人口の四分の一がそうどうにまきこまれた。（略）

軍隊の出動たところは十七県六十市町村もあつた。警察は蜂起した民衆には役立たなかつた。まさに全国民的蜂起を軍隊の力でようやく鎮圧したものである」と。

このそうどう発生以後政府が採つた措置の主なるものは、次の通りである。

八月十一日 京都の騒動鎮圧のため軍隊出動（以後各地に出動）

八月十三日 政府細民救濟費一千万円を支出

八月十四日 米騒動の新聞記事差止め命令発動

八月十六日 穀類収用令公布（一千万円の責任支出で穀類収用—シベリヤ出兵用の兵糧買付）

八月二十一日 寺内内閣総辞職

こうして無為無策をばくろした官僚軍閥の寺内超然内閣にかわつて登場したのが初の政党内閣として知られる原敬（政友会）内閣であつた。

前田蓮山著「原敬伝」をみると、政党きらいの山県有朋が遂に原を推さざるを得なかつたのは米そうどうが民衆に基盤をもたない官僚超然内閣の為起つたからだと書いているが、これは奇妙な論理である。なぜならば当

時はまだ極端な制限選挙時代で、普選になつたのは大正十四年であり、民衆政党などなかつたからである。

果せるかな原はこの米価の値上りにたいして殆んど効果的な措置を講じなかつた。それはこれだけ天下を震撼した大そうどうにも拘らず、八年から九年にかけて米価はさらに暴騰をつづけたことがその何よりの証拠である。しかし原敬のこうした貧弱な食糧政策はパン食普及には大いに役立つた。それは彼が声を大にして米の代用食としてのパン食を奨励したからである。彼がパン食を奨励した理由は二つあつた。その一つは粉食を奨励することによつて内地米一边倒の食習慣を多角化することは、とりも直さず米そらどうの原因をなくする有力な手段だということであつたがもう一つは占領したあの広大なシベリヤを日本の支配下に入れた場合、日本人にパン食の習慣をもたせることが現地に日本人を定着させる必須の前提だと信じたからである。原内閣が一週一回以上パン食採用という兵食の改良を率先して行つたのもこうした戦略的 requirement によるものであつたが、この辺のいきさつにはあとでさらに言及する。

何れにしても米価の暴騰はパン食の普及にとつてはプラスであつた。この点について大正七年五月十九日付の大毎はこんな記事をのせている。

「物価の暴騰は下級俸給生活者にとつてもつとも深刻な打撃を与えた。ある役所の食堂のボーキによれば『以前下の方の官員さんの昼飯には西洋料理一皿と飯というような注文が最も多うございましたが、近ごろはそれもめつき減つて、そのかわりにバタまたはジャム付パンの需要が素晴らしくふえました。これも物価の騰貴がなせるわざです』と」

「日本の百年」（筑摩書房）はこの記事を評してこう云つてゐる。

「西洋料理をたべたら月に六、七円はかかる。バタをつけたパンなら半斤で八銭、月に二円だ。塩鮭で弁当をつくるよりも安上りである。しかしバタつきパン半斤によつて満たされたのは彼ら下級俸給生活者の胃袋であるよりは、むしろ大正ブルヂヨア趣味への憧れだつた。バタつきパンはとにかく西洋料理だつたからである」と。

しかしサラリーマンはこうしてパン食党として登場したが、筋肉労働層はやがて内地米をあきらめて南京米党へとかわっていく。それは一升二十錢以下だつた内地米が一円以上になるととてもそらするしか方法がなかつたからであるが、当時の世相を語るデータとしてノンキ節を示せば次の通りである。

ノンキ節（添田啓蟬坊作—大正七年）

貧乏でこそあれ日本人はエライ

それに第一辛抱強い

天井知らずに物価はあがつても
湯なり粥なりすすつて生きている

ア、ノンキだね。

万物の靈長がマツチ箱みたよな

ケチな巣に住んでいばつてる

アラシにぶつとばされてもツナミをくらつても

「天災ぢや仕方がないサ」ですましてる

ア、ノンキだね。

南京米をくらつて南京虫にくわれ

豚小屋みたいな家に住み

選挙権さえもたないくせに

日本の国民だといばつてる

ア、ノンキだね。

機械でドヤして血肉をしづり

五厘の「コウヤク」張る温情主義
そのまた「コウヤク」を漢字で書いて
「波沢論語」と読みますげな

ア、ノンキだね。

一本ある腕は一本しかないが
キンシクンショが胸にある

名譽だ 名誉だ 日本一だ

桃から生れた桃太郎だ

ア、ノンキだね。

膨脹する膨脹する国力が膨脹する

資本家の横暴が膨脹する

おれの嬢あのお腹が膨脹する

いよいよ貧乏が膨脹する

ア、ノンキだね。

しかしこの南京米もくえぬ層があつた。そこでそんな人々にたいして、会計検査院長から東京市長に転じた田尻稻次郎は「貧乏人は豆粕をくえ」と豆粕食を奨励したが、これを市長に進言したのは九十パンの開祖田辺玄平であつた。左記は当時はやつた豆粕ソングの歌詞である。

豆粕ソング（蛭蟬坊作）

高い日本米はおいらにや食えぬ

おいらそんなんの食わづともヨ

どんな変なもの食わされたとても

生きていられりやそれでよい

米はあがろと下がるとままで

外に南京米がないじやなしヨ

何をくよくよ鳴豆もござる

腹はいたんでも辛抱する

米が高いとて泣くよな奴は

日本男子のつらよごしヨ

何をくよくよ水のんでさえも

少しやどうかこうか生きられる

見えるものでさえありや文句いわぬ

どうせ好いたものくえやせずヨ
うまいまずいは申さぬときめて

今日も豆の粕あすも粕

ハ粕だ、粕々、おいら米やくえぬ

食えりやこの世が嘘ぢやものヨ

何はともあれオメデたい御代ちや

生きていられりやありがたい。

この外にも豆粕市長を非難したいいろいろな演歌がはやつた。

東京節バイノバイノバイ（抄）

ハ東京で自慢はなんですね

三百万人うようよと

米もつくらずにくらすこと

タジレた市長を仰ぐこと

それにみんなが感心に

市長のいうことよくきいて

豆粕くうことやせること

シチヨウサンタラケチンボデバイノバイノバイ

洋服モツメエリデフルイフルイ

デイアボロ贊唄（抄）

ハ代々続いた能なしの市長

わけてトボけたいやなぢかい

豆の粕などくえとぬかしたる

子供だましの道もはげて

怖こわやロクヌスピトと罵る声々

イナジロイナジロイナゼロイナーゼロ

まことに不評な東京市長であつたが、この田尻市長に豆粕めしをすすめた

田辺玄平は、豆粕の優良蛋白源であることを強調したのであつて、その卓見は賞讃に値することというまでもない。

さて軍隊まで動員してやつと米騒動を鎮圧した寺内内閣にとつてかわつた原敬内閣は差し当りの措置として次のような手を打つた。

大正七年十月三

第七節 大正時代の製粉工業

十日 米、粉輸入

税の減免

同年十二月二十

四日 外米百万石

の輸入決定

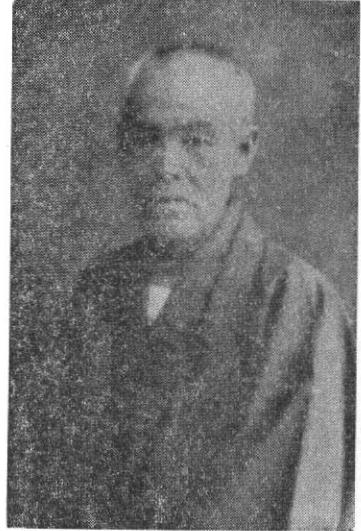
大正八年三月二

日 米価調節のた

めの小麦及び小麦

粉関税の減免

丸十パンの始祖田辺玄平翁



こうしたことから二月二十六日には期米が大暴落を演じたが、外米やメリケン粉でもつて内地米の不足を緩和することはできないということがわかると暴落した米価はたちまち復元した。そして端境期の七月から更に急激な上昇にうつり、翌九年一月には期米相場（石当り）が遂に五十五円台を突破したのである。米騒動が起つた大正七年八月の平均相場は三十九円であるから、それよりもさらに四割以上の値上がりである。しかしそれでもさわぎはおこらなかつた。それは当局が警察力や軍隊でもつてさわぎを抑えつけるだらうことがわかつていただらうに外ならない。

だが米騒動はかげをひそめたが、そのかわり大規模な質上げ要求のサボタージュやゼネストが発生した。この年はじめて行われた上野のメーデーに一万人の労働者が参加したが、これは決して偶然ではない。

しかし大正九年三月十五日には第一次反動恐慌がおこり、期米、綿糸、生糸、諸株は惨落し破綻者が続出した。そして翌四月二十一日にはニュヨークの株式が惨落して世界的な恐慌になつた。それがまた日本にはねかえつてしまつたのであるが、五十円台の期米相場が四十円台におちたのは六月、三十円台におちたのは九月、二十円台におちたのは十二月であつた。

第一次世界大戦の勝敗を決したのは大正六年四月四日のアメリカの参戦であつた。当時連合国の一員だつたロシアはドイツ軍の猛攻に耐えかねて敗退をつづけていたが、やがてロシアはドイツと単独講和をむすんで戦線から脱落していった。こうしてロシアにはレーニンを首領とする赤色政権が誕生し、ドイツ軍はアメリカを迎えうる有利な条件にめぐまれたのであるが、新鋭アメリカの物量作戦には抗すべくもなかつた。それは刀折れ矢尽きたドイツにカイザル皇帝放逐の革命がおこり、遂に大正七年十一月十日ドイツの降伏によつて五年越しの大戦に終止符が打たれたことによつて明かである。

この戦争終結の結果、日本の経済界は一時大混乱に陥つたが、翌八年四月から再び戦後景気に見舞まわれた。この戦後景気は約一年つづいて大正九年三月十五日の第一次戦後反動恐慌にみまわることになつたのであるが、これはその後の慢性的恐慌の起点となつた。

そこでその恐慌が食糧問題に及ぼした影響如何となるが、そのままに製粉界と糖業界のうごきにスポットをあててみたい。

小麦粉関係年譜（大正三—昭和一四）

年次別	月 日	事 項
大正三年	七、二八	第一次世界大戦勃発
	二、二五	熊谷に松本米穀製粉誕生（日東の前身）
七	四、二二	日清製粉はじめて高級パン用粉「カメリヤ印」を売り出す。 前後して日粉その他之に倣う 日粉、日清、東亜三社操短協定成立

大正四年

四、二二

日粉、日清、東亜三社操短協定成立

製粉界原料小麦商談の進捗と同時に粉価暴落して混

大正五年	小麦粉の需要激増する。 この年から翌年へかけて小麦粉の輸出激増
大正六年	世界大戦終結、シベリヤ出兵、米そうどう
大正七年	暴利取締法中に穀粉類を追加 農商務省東京小倉久兵衛の小麦買占に戒告、そのた め粉価暴落
大正八年	戦後景気
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 一一 一二	<p>小麦粉急騰</p> <p>日清製粉の配当年五割五分 うどん、そば七錢、八錢、九錢、十錢と年四回値上</p> <p>日清製粉東京パン(株)を創立</p> <p>日清製粉横浜工場で製パンし糧穀廠へ納入</p> <p>日清製粉名古屋工場旧ドイツ俘虜を雇つて製パン、 日清パンとして市販する。</p> <p>第一次戦後反動恐慌</p> <p>小麦粉相場の頂点</p> <p>日粉鉛木商店の大里、東洋二製粉を合併</p> <p>小麦及び小麦粉輸入税復活</p> <p>日清製粉配当年六割となる</p> <p>中間景気</p> <p>小麦粉相場急落</p>
大正九年	
大正十年	

小麦相場急騰	日清製粉貨物自動車による小麦粉の配達開始
日清製粉の配当年四割四分におちる	第二次戦後反動恐慌
大正十一年	関東大震災、震災恐慌
大正十二年	震災のため大麦、小麦、大豆の輸入税減免（翌年二月二六日迄）
大正十三年	関税改正準備委員会設置
大正十四年	東洋一の日粉横浜工場（四千バーレル）竣工一本格的接岸工場
大正十五年	日粉東亜製粉を合併
一〇、二	日清讃岐及び九州製粉を合併
一一、一九	原料安製品高のため製粉各社四円八〇銭以下売止めを協定
一二、一五	関連業界総ぐるみで小麦及小麦粉関税引上げを陳情
一六	両院協議会で小麦関税引上げ決定
二六	日清製粉鶴見工場第一期工事完了（七千バーレルで東洋一となる）
二五	日粉、日清、日東、名古屋、増田、大阪、日本精米の製粉七社減産協定成立
二五	日粉、日清合併契約成立
二五	日清、日粉との合併契約破棄
二五	日銀、日粉救済資金八百万円の特別融資を決定
二五	大正天皇歿（昭和と改元）

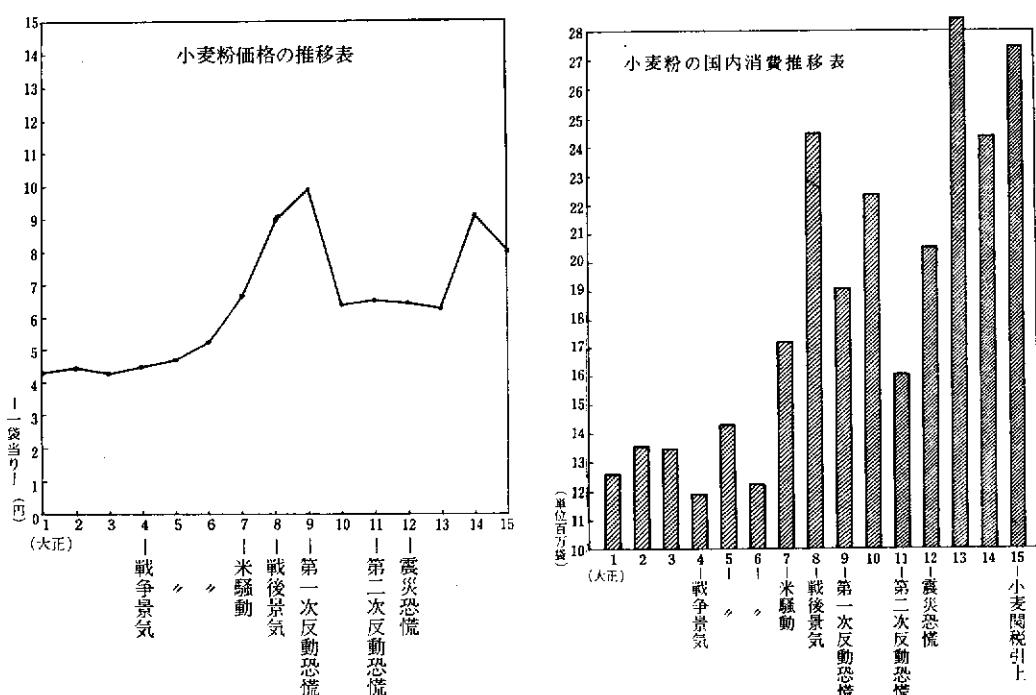
以上は大正時代の小麦粉年譜であるが、これに言及するまえにその需給状況と価格の推移について言及するとあらまし以下の通りである。

大正期の小麦粉需給及価格推移表

年次別	内地供給高 千袋	価格(一袋当)
大正元年	一一、六五七	四・三一銭
二年	一三、六三七	四・三九
三年	一三、五一〇	四・三三
四年	一一、九〇〇	四・四六
五年	一四、三三九	四・六八
六年	一二、三一	五・二四
七年	一七、二四三	六・六二
八年	一四、五一〇	八・九六
九年	一九、一四九	九・九四
十年	二三、三九二	六・四一
十一年	一六、〇一五	六・五四
十二年	二〇、五九〇	八・九
十三年	二八、四五六	九・九
十四年	二四、三八〇	六・三二
十五年	二七、五五八	六・四三
十六年	七・九七	六・五四
十七年	九・一三	六・三一
十八年	九・七	六・三二
十九年	九・九	六・四三
二十年	九・九	六・四一
二十一	一一、九〇〇	六・五四
二十二	一一、九〇〇	六・五四
二十三	一一、九〇〇	六・五四
二十四	一一、九〇〇	六・五四
二十五	一一、九〇〇	六・五四

以上の通りであるが、これでみると粉価の上げ足が早くなつたのは大正六年からであり、それが頂点に達したのは大正九年であつた。そしてこれが需給動向をみると、米どうの大正七年から需要が急上昇し、大正九年の第一次反動恐慌期には激落しているが、その後再び急上昇に転じている。これは米どうを契機として小麦粉がその代用食的役割をいちぢるしく強化したことを示すものであるが、これにたいするパンの寄与率が高かつたことにはあとで言及する。

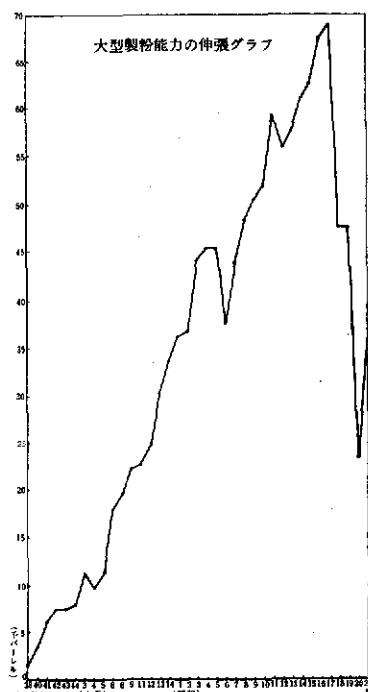
なお本表をみると麦価が高くなつてもその需要は低下しないことを示しているが、これは麦価の上昇率が米価の上昇率を下回つた為におこつた現



象である。

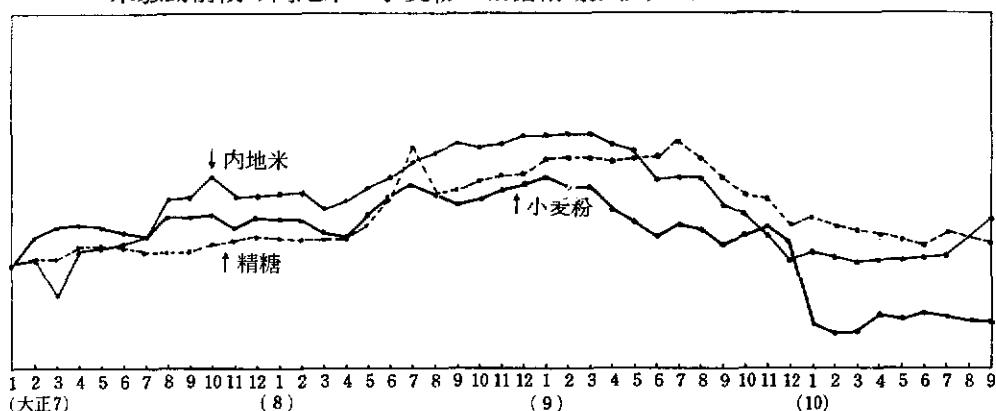
それから製パン原料粉挽碎の大型工場の生産力の成長の跡をたどつてみると次表の通りであつて、これが高度成長に転じたのは大正五年であつた。その原因がそのころから舶來のメリケン粉に代つて大型工場がパン用粉を挽きはじめたことと、小麦粉の移輸出がはじまつたことにも関係があることはいうまでもない。

なお、ここで米そらどう前後の小麦粉価格の月別推移をグラフとして示せば次の通りである。



このグラフによつてみると、麦価の上げ足が早くなつたのは大正六年の四月以降であり、米そらどうがおこつた翌七年の八月から十二月にかけては殆ど横ばいで推移している。しかしそれから翌年三月にかけて急上昇した麦価は、多少の曲折を描きながらゆるやかに上りつけた。それが再び急上昇に転じたのは大正八年の四月以降であるが、これが戦後景気の影響であることはいうまでもない。この上げ足が頂点に達したのは大正九年の一月であつたが、それが急降下に転じたのは同年三月からで、これが三月十五日からはじまつた第一次反動の下げ足が一応横ばいにうつたのは同年六月以降であるが、大正十年十二月から麦価は一挙に暴落した。それは

米騒動前後の内地米・小麦粉・精糖相場推移表（大正7年1月～10年9月）



九年十一月には一袋六円二十二銭だった麦価が、翌年一月には三円九十七銭まで暴落したことで、そのひどさを知ることができよう。それは実に三割六分の値下りだからである。

米価が暴落に転じたのは

正九年三月の第一次恐慌以後であつたが、麦価が暴落したのはこの年の暮であつた。麦価の暴落はその国際価格の暴落が主因であつたが、それはやがて同年十月四日の中間景氣の瓦壊となり、翌十一年四月十七日の第二次反動恐慌となつた。

しかし米価と麦価の推移をグラフにしてみると次表の通りであつて、小麦粉の対米比率は相対的に低かつた。この時期に大きく粉食が伸びた根本原因がここにあることはいうまでもない。

第八節 製粉界の好調と反動恐慌の波紋

大正時代の製粉界の推移は前表年譜記載の通りであるが、大戦景気が出たのは大正四年の暮からであった。それは大戦の影響で小麦粉の輸入が減り、移輸出があえたからであるが、翌年から内需もふえていった。それは不況のための大正四年の春の日粉、日清、東亜の三社間操短協定が自然消滅状態になつたことからも察することができる。

大戦景気の波にのつて製粉界が次第に好調に転じていった過程は上の日清製粉の配当表によつてうなづけよう。

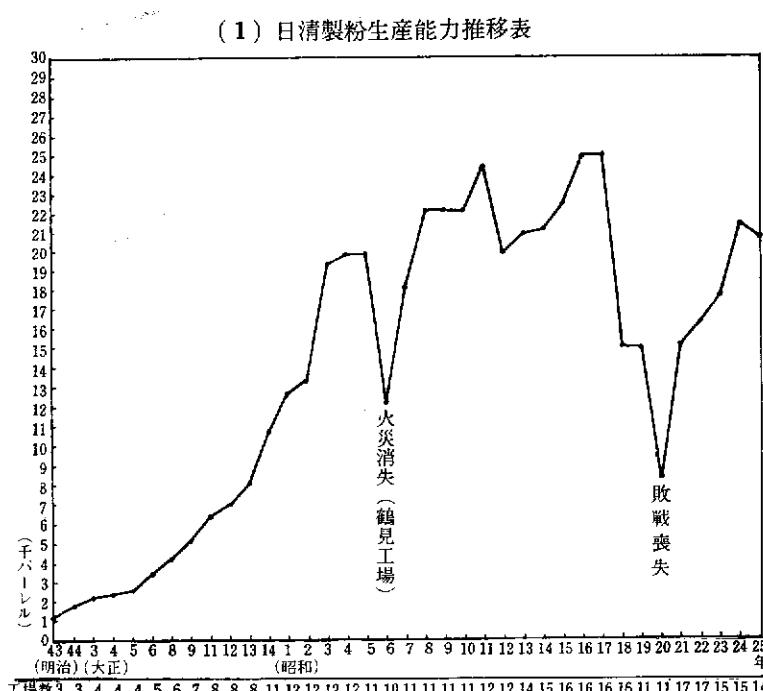
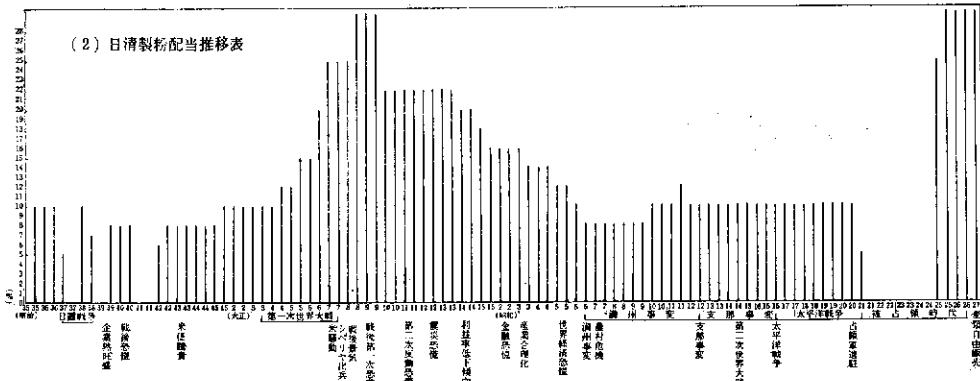
本表をみると日清製粉の配当が好調に転じたのは大正四年の下半期からであり、それが最高潮に達したのは大正八年の上半期から十年の上半期までであった。

それ以後配当は反動恐慌の影響をうけて次第に下降線をたどり、それが底を衝いたのは昭和六年の下半期であつた。

この配当グラフからまづ第一に推測し得ることは、大正七年の米そうどうが粉食の成長発展の決定的なキ

ツカケとなつたということであるが、パン業界の盛衰消長も大体においてこのグラフの通りだといふことができる。しかし代表的な製粉会社のこのようない業績は、大正五年からはじまつた無謀に近い設備拡張競争による操業率の低下を製粉カルテルの結成という人為的な価格維持協定によつてもたらされたものであることを付け加えなくてはならない。

いまわが国製粉企業の王座にある日清製粉の設備能力の推移をみると、その実体は前表グラフの通りであつて、大正五年から昭和三年までその設



備能力は急上昇をつづけている。これは工場の新設と弱小製粉企業の相次

ぐ合併によつてもたらされたものであるが、このような新設と合併競争は主としてライバルである日本製粉との間で行われた。この点について「日清製粉史」は次の通り言及している。

「当社は大正三年から十四年までに四工場を新設し、四社の工場を合併して総能力は一千八百バーレルから一万八百バーレルへと五倍以上に増加し、日粉は同期間に増設のはか大正九年に東洋、札幌、東北、大里の四社を、大正十四年に東亞をそれぞれ合併して、二千五百バーレルから一万六千バーレルへと六倍以上に拡大し、日東製粉（當時熊谷製粉）は六十五バーレルから一千三百バーレルに増加した。この外に愛國、新田、大阪、相模製粉等が新設された。その結果大型製粉の総能力は大正元年に九千六百六十五バーレルであつたのが、大正十四年には三万三千六百九十九バーレルと三倍以上に増加した」と。

それでは小麦粉の生産はどうであつたかといふと、大正元年の一、二五〇万袋が大正十三年には三千万袋台を突破しているからこれまた三倍に近い激増である。したがつて当時の設備増設は、大体に於て生産増強の線に沿つた合理的なものであつたが、第一次反動恐慌以後も設備増設競争は止まなかつた。

この点について「日本製粉史」は「大正十一年には横浜に空前の四千バーレルという巨大な製粉工場の建設を計画し、さらに朝鮮への工場進出をさえもくろんだのであつた。これには日清製粉も大いに刺戟され、横浜工場にならつて鶴見工場の建設を立案するほどのありさまであつた」と言及しているが、この日清鶴見工場は七千バーレルという東洋一の大工場であり、その第一期工事の完了は大正十五年、完成は昭和三年の秋であつた。消費者と二次加工業者泣かせの製粉カルテルが結成されたのはそれから二年後の昭和五年三月であつたが、これはこうした拡張競争がもたらした必然の帰結であつた。それはともかくとして日清製粉史は当時の製粉界の実状を次の通り要約しているが、これは概ね妥当な見方とすることができよ

う。

「小麦粉は大正三と四年ころは米価安により消費があえないと生産が少かつたが、五年ごろから急増し、小麦粉輸入は戦時中激減し、大正八年の関税減免やその後の米高騰により一時増加したが、間もなく漸減歩調をたどつた。このころから輸入小麦粉は事実上駆逐されたのである。一方小麦粉輸出は戦時中一時増加した。（略）簡短にいえば大戦前後においては都市人口の増加と戦時需要と輸出の増加により、小麦粉の需要は増加したので製粉業は急速に発達した」と。

いまここに以上の分析の裏づけとなるデータを示せば次の通りである。

第一表 小麦の生産及び輸入

年次別	内地生産		輸入 千石	年次別	内地生産		輸入 千石
	大正元年	二二二			大正二年	二二三	
七	五、一七九	五、一七九	五、一七九	六	一、二三八	四、四五〇	一、二六一
六	五、二二六	五、二二六	五、二二六	五	一、二三八	四、四八八	一、二六五
五	五、二三一	五、二三一	五、二三一	四	八六三	五、二三一	一、二六五
四	六、九八七	六、九八七	六、九八七	三	一六一	五、二三一	一、二六五
三	五、八八七	五、八八七	五、八八七	二	一二七	六、九八七	一、二六五
二	五〇七	五〇七	五〇七	一	一一〇	六、九八七	一、二六五
一	一一〇	一一〇	一一〇			六、三六〇	一、二六五

第二表 小麦粉の生産及輸出入

年次別	内地生産		輸入 千袋	年次別	内地生産		輸入 千袋
	大正元年	二二二			大正二年	二二三	
七	一一六	一一六	一一六	六	一、二二二	一、二二二	一、二二二
六	一、二二二	一、二二二	一、二二二	五	五、一九〇	五、一九〇	五、一九〇
五	一、二二二	一、二二二	一、二二二	四	五、二六八	五、二六八	五、二六八
四	七、七二二	七、七二二	七、七二二	三	三、二四八	三、二四八	三、二四八
三	七五七	七五七	七五七	二	三、三九九	三、三九九	三、三九九
二	一、一五二	一、一五二	一、一五二	一	一、一八一	一、一八一	一、一八一
一	一、一五二	一、一五二	一、一五二		一、一八一	一、一八一	一、一八一

一、四九	二三、一四九	一、七五五	八三
一九、四五〇	二一、三八四	六二八	一
二一、三八四	二五、四〇一	五七三	七五
二五、四〇一	二九、三七一	六七七	二六五
二九、三七一	三〇九三	九一七	四六八
三〇九三	三五三	二〇五	五〇六
三五三			二一〇一

第三表 小麦・小麦粉相場累年比較

年次別	内麦相場	外麦平均	小麦粉卸価格
大正元年	五・二三円	四・三二円	二・七〇円
一四三二一〇九八七六五四三二	五・四〇	四・六八	二・六七
一〇〇八〇〇	五・一六	四・六六	二・六四
一〇〇五七	五・三九	四・六六	二・七九
一〇〇五八	五・二四	四・六六	二・五五
一〇〇九四	四・三三	四・六八	二・八一
一〇〇三四	四・三九	四・六八	三・二五
一〇〇六二	四・二一	四・六六	三・九八
一〇〇八・九	四・一	六・四一	三・六八
一〇〇六・四	三・七一	六・四三	三・九八
一〇〇六・三	三・九八	六・三三	四・八一

下落している。そのあたりをくつて内麦の生産が停滞し、外麦の輸入がふえているが、政府はここに目をつけ内麦増産外貨流出防止のためと称して外麦関税の大引上げを行なった。これが決行されたのは大正十五年であったが、そこは外麦が値上がりして内麦との価格差は僅少であった。したがつてこの時の外麦関税の引上げは、反動恐慌による外貨の減少をくいとめる苦肉の策だったということになるが、製粉界やパン・メン・菓子業界はこの関税引上げ反対の猛運動を展開した。そのために貴衆両院の足並みがみだれ、遂に両院協議会となつた。そして引上げ幅を低くすることで妥協、遂に関税引上げが実現したが、小麦は毎百斤七十七錢を一円五十錢に、小麦粉は一円八十五錢を一円九十錢に引上げるという内容のものであつた。

この運動の先頭に立つて善戦した白鳥三朝氏は「あのときは全員火の玉になつて斗つたが、ある程度の成果を挙げ得たので、愉快な思い出の一つである」と語つている。

第九節 大手製粉のパン業界進出

前節で第一次大戦による外麦粉激減の為、大型製粉がパン用粉を挽きはじめたことに言及したが、これは国内製粉がウドン粉専門から高級なパン用粉を挽けるところまで向上発展してきたことを示すもので、大いに注目すべき事実である。そこでこの点についてまづ日清製粉史をみると、次のようないきさつが述べられている。

「日清製粉の専務正田貞一郎は大正二年に欧米の製粉工場を視察したが彼はその視察であちらの工場が立派な実験室をもち小麦粉の理化学的研究を行つていてことに感銘をうけた。その結果翌三年二月から社内に実験室をおいて研究に着手したが、その研究を担当した同社の宇野正雄は次の通り語つてゐる。」

「當時好評を博していた米国製小麦粉の高級薄力品たるライオン印及び高級製パン用品たるベスト印に匹敵すべき優良粉を内地小麦を以て製出せ

んと企図し（略）その試作小麦粉を実需家に提供して試験を行い、漸く前記二製品に近似せる品質の粉を製作し、高級薄力品をヴァイオレット印、高級パン用品をカメリヤ印として販売し、徐々に声価を得てついにライオノ印及びベスト印に置きかえることができた」と。

しかしこの書き方はいささか自画自讃のそしりを免れない。それは内麦でもつて外麦特に硬質外麦を挽いた粉と近似した良品が得られるはずはないからである。それにも拘らず高級メリケン粉に代つて内麦を挽いたパン用粉が徐々に使われだしたのは、戦争のためにパン用メリケン粉の輸入がほとんど止まつてしまつたことと、それが中力粉で間に合う菓子パン用に主として使われた為とみるべきであろう。

なお日清製粉史は前記の商標について次の通り言及している。

「当社創業後当分の間小麦粉の用途は主として製メンであつて、商標は明治四十一年ごろまでは旭、鶴、亀等にすぎなかつたが、製菓、製パンその他用途も次第に増加し、これにつれて商標も多くなつた。（略）大正から昭和にかけてできた商標は薄力品にフラワー、月、強力品にカメリヤ曲馬、オーション、ミリング、青蟬、ボイス、銀杏（いちょう）、赤鶴（あかうづら）ナンバーワン。メン用に雀、千成、えび、糊用にオームがある（略）古くから一貫して使用される当社の代表的商標は強力品として、カメリヤ、曲馬、オーション、青蟬、ナンバーワン、銀杏（略）などである」と。

日清製粉と相前後して大型製粉が競つてパン用粉を挽きはじめたことはいうまでもないが、初期のパン用粉は日清製粉のカメリヤ印、日本製粉のカーブ印、東亜製粉のアキシシマ、増田製粉のベストなどであつた。

しかし初期の国産パン用粉はあくまで大戦による舶来粉の輸入の激減を糊塗するための手段にすぎなかつた。それは大正四年、五年六年と激減した舶来粉が、七年ごろからまた増勢に転じてることからも容易に知ることができる。

しかし大正も終り頃になると、舶来粉は再び減少に転じている。それが

国内製粉業者の製粉技術の進歩向上によるものであることは改めていうまでもないが、国内製粉がパン用粉を挽くようになつてから次第にカナダ産のマニトバ（強力小麦）の輸入があえていつた。それは大正十一年輸入のカナダ小麦七万五千屯が大正十三年には二十九万四千屯に伸び、昭和七年には六十万五千屯にのびてることからも察するに難くない。

さてこうしてパン用粉を挽きはじめた製粉会社は、いやでも研究室をもつてパンの試験焼きをしなければならなくなつた。こうしてパンについての知識を得た製粉会社は、やがて商品としてのパンを焼き、さらに製パン会社をもち、イースト会社をおこすところまですんでいつたのである。当時この方面を担当していた日清製粉の東大農芸科学科出身技師宇野正雄は、そのなりゆきに次の通り言及している。

「大正七年五月横浜工場の敷地内にやや完備せる化学研究所を設置し、本格的に科学・技術の研究を推進した。大正八年には同所でパンの製造を試み、日産八百斤（十袋）に達し糧秣廠等へ納入した。これが基礎となつて大正八年十二月に当社傍系（ぼうけい）東京パン株式会社が創立された。また同年に私は欧米に出張し（略）特に米国のイースト工業、スイスの綿工業視察の結果を正田専務に報告し、これがのちのオリエンタル酵母工場及び日本綿業会社の設立となつて具体化した」と。

なお、これと前後して日清製粉名古屋工場でもパン工場をつくつて製パンをはじめている。

「名古屋工場では大正八年工場構内に製パン工場を建設し、ドイツ人俘虜の製パン技師を雇い入れて日清パンとして売り出し、のち製造を東京パン会社に移した」（日清製粉史）

ところでこの東京パンの設立であるが、これは米そうどうに刺戟された農商務省や糧秣廠などのすすめによつて設立されたもので、そのねらいは製粉会社が代用食としての食パン普及運動の先頭に立つということだつたのである。この点について当時この新会社設立の衝に当つた田中安治氏は次の通り語つてゐる。

「たまたま日清製粉で大規模な製パン工場をつくり、良品安価な食パンを東京市民に提供する企画があつたので、私もその創設準備に加わり製パン技術の体得や敷地さがし、設計建設などまで殆ど一人でやらねばならなかつた。東京製パン株式会社の社名の下に、市外雑司ヶ谷の工場に火入れしたのは翌九年四月であつた。ところが品質、価格とも自信をもつて発売した食パンだつたがなかなか大衆がついてこない。（略）そこで不本意ながらアンパンやジャムパンなどをつくつて漸く採算（さいさん）がとれるようになつた」（日清製粉史）と。

この大きな企画が大きなパン工場として実現しなかつたのは、そうするとパン業界を刺戟して、本職の粉屋商売に影響するのを心配したからであつて、この点は日清と相前後してパンの製造に手を出した日粉が、研究所の名の下に商売をやつたのと同じ理由によるものである。

おもしろいのは日清製粉名古屋工場がドイツのもと俘虜を先生にして製パン企業にのりだすことになつた点で、名古屋在の敷島製粉が敷島パンをつくつてパン業界に進出したのも、ドイツの俘虜にパンを焼かせたのがそのキッカケであつた。

第十節 戦後反動恐慌の煽り

第一次世界大戦を契機として最も大きく発展した製粉会社は日本製粉と日清製粉であった。ところが戦後の反動恐慌での二大製粉は経営上の危機に逢着した。そのいきさつについてはあとで言及するが、この危機をのりきるために二大製粉企業は財閥の援（たすけ）をもとめたのである。その結果日粉は三井財閥の傘下に入り、日清は三菱財閥と特殊な関係をもつようになつたが、こうして財閥と結んだ大製粉は戦後の不況時代を切りぬけるために、減産協定を結んだり、製粉共販組合をつくつたりして小麦粉の市価を人為的に釣り上げることになつたのである。そのためにパン屋、殊に食パン屋は非常な窮地に陥つた。パン屋の儲けは小麦粉の空袋売却代位のものだといわれたのはその何よりの証拠である。

そこでまづ日粉がどのようにして三井の傘下に入つたかであるが、このいきさつを語るためには少しく過去に遡（さかのぼ）らなくてはならない。既述の通り日粉の創立は明治二十九年であるが、創立から大正元年まで日粉をひきいきたのは専務（社長欠員）の境豊吉であつた。なかなかの手腕家でその業績にもみるべきものがあつたが、大正元年にこの人が引退して前山久吉と称する人物が専務として登場したのである。しかしこの人はワーマンであつたのに拘らず見るべき業績を挙げ得なかつた。それは前山の時代に日清の生産力が日粉を追いぬいたことによつて象徴されているが、大正八年この前山専務にかわつて社長に就任した岩崎清七は、日清製粉にたいしライバル意識をもやして積極經營の先頭に立つた。原麦の海外から買付けてそれを三井物産に一任して製粉一本に進んだ彼は、大正九年に東洋製粉の三工場と大里工場（鈴木商店）及び札幌製粉の三社六工場を買収または合併して忽ち日清製粉を追いぬき、再び製粉界の王座についた。しかしそれでもなお満足できなかつた岩崎は、大正十一年には横浜に四千バーレルという当時空前の大工場を建設、さらに朝鮮への進出をもくろんだ。これに刺戟された日清製粉が、翌大正十二年この日粉横浜工場を上廻る七千バーレルの巨大工場を翌十二年につくりはじめたことは前述の通りであるが、現実に即しないこのような積極經營には無理が伴つた。

大正九年には第一次反動恐慌がおこり、大正十一年には第二次反動恐慌がおこつてゐる。したがつて当時の財界は整理期にあつた。そんなときに採つた積極經營であるから、經營が次第に苦しくなつていくのは理の当然であるが、特に大里工場の買収は日粉の内容悪化に拍車をかけることになつた。

大里工場は当時三井、三菱につぐ大貿易商として知られていた鈴木商店の経営であつたが、この大里製粉は投機熱が最高潮に達していいた、大正八年・九年の最高値で大量の外国小麦を買付けその支払手形は一千万円の巨額に達していた。その負債の全部を日粉は引きついだのである。

正八年十一月の石当り二十八円の小麦が翌九年の十二月には十五円にまで

下つてしまつた。これは五割以上の暴落であるから日粉はとても鈴木商店に小麦代金を支払い切れるものではない。こうして日粉は鈴木商店に対し背負い切れない程の負債を負つてしまつたのであるが、恐慌にいためつけられている点では日清製粉も程度の差こそあれ同じことであつた。

苦しいから双方が安売りする。その結果双方とも経営が悪化することになる。所詮惡循環であるが、そんなら双方が合同したらどうかという話を持ち出したのは東武鉄道社長の根津嘉一郎であつた。当時の皮算用では両社が合同すると三千万袋（総需要の90%以上）の実績であるから、一袋十銭の値上がりとみても三百万円は軽くもうかるはずだというのである。これはいまの金かねにすると三百三十億円の粉を売つて三千万円以上その利益がふえるというのだからまことに工合のよいはなしである。

双方とも大乗氣で合併談はとんとん拍手に進み、大正十五年十月二日には両社が合併仮契約を締結するに至つた。ところがそれから二十四日後の十月二十五日、突如として日清から両社の合併はご破産にしたいとの申出があつたのである。この年の春五月二十六日には日粉、日清、日東（松本米穀）名古屋、増田、大阪、日本精米の大製粉七社が不況に耐えかねて減産協定をむすんだばかりである。そんな苦しいときになせ日清製粉はこの耳寄りな合併談を放棄したのであらうか。この点について「利権物語」（時事新報編—昭三）は次の通り言及しているが直疑のほどはわからない。

「多年の彌縫策（ひはうさく）愈よ行きづまつて、日清に身売ということに決し、日清の社長正田君と日粉社長岩崎君との間に合併の契約まで取り交したところが、のちになつて正田君が探査したところによると、日粉の内容が想像以上に悪化していることを知つた。正田君は製粉業をもつてひつ生の事業とし一身は元より一族の全資産を挙げて、その経営する日清製粉に投資している男なのである。茲に荷重介いな日粉を背負うことの利害は賞与目当ての並重役と同日でない。一族一家の興亡の岐るるところといふので考えた末、一旦調印した合併契約であるが断然これを破棄する決心をしたのである。契約破棄を決心した正田君は直ちに日頃信頼をつないで

いる某大銀行（三菱銀行のこと）の重役に具（つぶさ）にその間の事情を訴え、今後の援助方を依頼したところ快諾を得たので、愈よ日本製粉と敵対行動をとることになった。こうなつた鈴木商店は日粉を旨く売り抜けて正田君に一杯くわしたつもりでいたところ、當て事と何とやらで、向うから契約破棄と来られて大いにおどろき盛んにその不信を責めたが、正田君は人の噂も七十五日と取り合わない」

以上は両社合併破棄の真相といわれる事実の一端であるが、その後のいきさつを日本製粉史（企業の歴史—安藤良雄）は次の通り語つてゐる。

「合併問題の不調を機として会社の信用が全く失墜したので、ここに至つて日粉も独力で事態を切り抜けることが困難になつた。また鈴木商店も時を同じくして危機に瀕したから岩崎社長は鈴木商店の金子直吉と相談して合併失敗ののちすぐさま政府に援助を求めるにした。（略）かくして日粉の救済問題は世間の耳目を集め政治問題となつたが、八方手をつくして苦境をしのいだたん場の大正十五年十一月十九日、商工省議で日粉は政府としても救済すべきであると決せられ、日銀の諒解の下に台湾銀行から八百万円の日粉、鈴木商店両社に対する融資が実現したのである。岩崎社長は大正十五年度下期の決算で千五百萬円の赤字を計上し、会社を危地に陥れた責任をとつて退いた」と。

しかし問題はこれで片付かなかつた。それはその翌年にあたる昭和二年春の金融恐慌で、台湾銀行が鈴木商店への貸出しを打ち切つた為に三井、三菱に次ぐ天下の鈴木商店が倒産し、その煽りをくつて台銀が休業するという大金融恐慌がおこつたからである。

この間のややこしいいきさつをここで詳しく述べる余裕はないが、当時の恐慌の進展状況を箇条書にして示せば次の通りである。

◇…三月十九日一二日 東京方面に取り付け発生

◇…同月二三日 日銀の非常貸出五億円に達す

◇…同月二十五日 台銀鈴木商店への貸出打切を決定

- ◇：四月一日 鈴木商店絶望のため諸株暴落、市場恐慌状態
- ◇：四月十六日 松府の鈴木商店救済案否決で、東西金融市場コール取引停止
- ◇：同月一八日 台銀本店ついに取り付け、内地海外支店一斉休業
- ◇：四月二一日 十五銀行休業し各地に取り付け
- ◇：四月二三日 政府三週間の支払猶予緊急勅令を公布、全国の銀行、信託、取引所など一斉休業
- ◇：五月九日 日銀特別融通及び損失補償法公布（七億円補償救済）
- ◇：五月一三日 モラトリアム期限経過、財界平穏回復

台銀休業当時の鈴木商店への債権総額は三億五千万円以上であつたが、そのうち三億円を国家が損失補償することになったのであるから、国氏の血税で尻ぬぐいしたことになる。

鈴木商店の破産で進退きわまつた日粉は、とうとう三井物産の手で更生をはかることになった。こうして昭和三年三月三井物産の常務として「剣刀安」といわれた安川雄之助が社長として日粉に天下つてきたのである。しかし安川はあくまで三井物産の安川であつて、日粉の利益の代弁者ではない。だから日粉社長となつた安川は、日粉の原料買入れと製品の販売を挙げて三井物産にやらせる方針をとつた。こうして日粉というわが国最古の近代製粉企業は財閥の完全な支配下に入つたのである。

「日清製粉史」をみると、「（日粉との）合併問題解消後当社と三菱商事との間に密接なる取引関係が始まつた」と記されているが、これは海外原麦の買付けを三菱商事にまかせることによつて、日清が三菱色をもち、これによつて三井にひきいられる日粉と決戦体制をとつたことを示すものである。

とまれこうして二大製粉は戦後の反動恐慌をきりぬけるために三井・三菱といふ二大財閥の影響下に入つた。そしてこの二大財閥を背景にもつた日清・日粉はやがて競争を打ち切り製粉カルテルをつくつて小麦粉の市価を釣り上げ、二次加工業者と消費者の犠牲においてその利益を確保する方

向へと進んでいた。

ここで製粉カルテル結成に至るまでのいきさつをふりかえつてみると、大正十五年三月二十九日の小麦関税引上げによつて業界は窮地に立つた。當は破綻たんを免れない。しかしほげしい業者間の販売競争はこれを許さない。そこで大手製粉七社がとつたのは減産協定であった。この協定が成立したのは関税引上げ実施後三カ月目の五月二十六日であつた。しかしこの協定をもつてしても不況による物価下落の大勢をくいとめることはできなかつた。

そこでこのされた最後の手段としてとられたのが日清・日粉両大製粉の合併工作であつた。両社が合併すれば一會社で小麦粉市場の九〇%以上を占拠することになる。そうなれば独占価格を形成することになり、經營の好転は必至だからである。

両社の合併仮契約が調印されたのは同年十月二日であつたが、これが日清製粉側の都合によつて破棄されたのが同月二十五日であつたことは既述の通りである。

それから後の混乱は前節で述べた通りであるが、この天下を震撼した金融恐慌を契機として、三井と日粉、三菱と日清の関係は飛躍的に強化された。その結果はどうであつたかといふと、しばらくの間両財閥を背景とする販売競争が展開されたが、やがて両財閥の妥協が成立して昭和三年十月には正田（日清）安川（日粉）の紳士協定が成立し、同五年三月十一日にには三井、日粉、日清三社を中心とする共販カルテルが結成され、パン業界はこのカルテルのために窮境に追いこまれる。しかしここでは昭和時代への言及はあとまわしとする。

第十一節 大正期の砂糖概観

精糖は菓子パンの主原料であるから、その品質と価格は菓子パンの盛衰成長に大きな影響を及ぼす。その意味で大正時代の精糖のうごきをみると

あらまし次の通りである。

一、消費量 大戦景気がはじまつた大正四年から大正八年の戦後時代で砂糖の消費量は垂直的な急上昇をつけたが、戦後第一次反動恐慌の大正九年にはその消費が激減した。しかし翌十年と十一年にかけてその消費は再び急上昇にうつつたが、それ以来やや上向き加減の横ばい状態にかわった。

二、価格 大正三年までの価格は横ばいであつたが、戦争景気の出た四年から米そうどうの七年まではゆるやかな上昇がつづいた。それが八年、九年になると急上昇に転じ、九年には大正元年の価格の倍以上にはねあがつた。しかし翌十年にはそれが暴落して十五年には九年を一〇〇とすると五二という指数となつた。

三、菓子パン 菓子パンは大正四年から八年までつづいたが、それ以後は原料高の製品安で非常な苦況になやまされた。その原因が経済恐慌による需要の減退にあることはいうまでもないが、いま一つは大資本を中心とした糖業界が操短協定、価格協定などによつて人為的に糖価の釣り上げをはかつたことである。

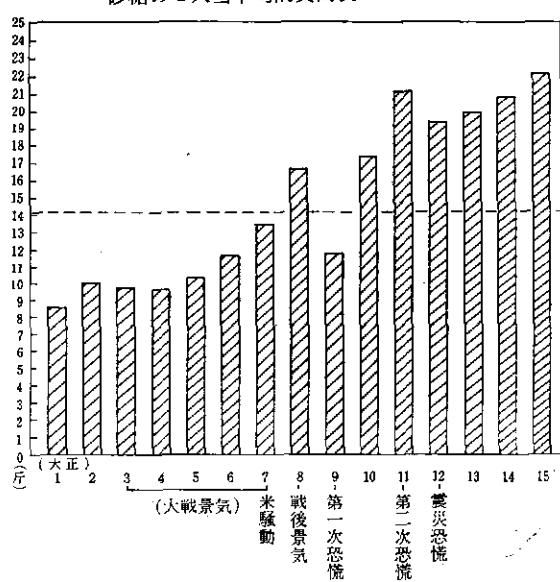
以上の前提のもとづいて大正時代の精糖業を概観するとあらまし次の通りである。

(A) 内地砂糖需給推移表

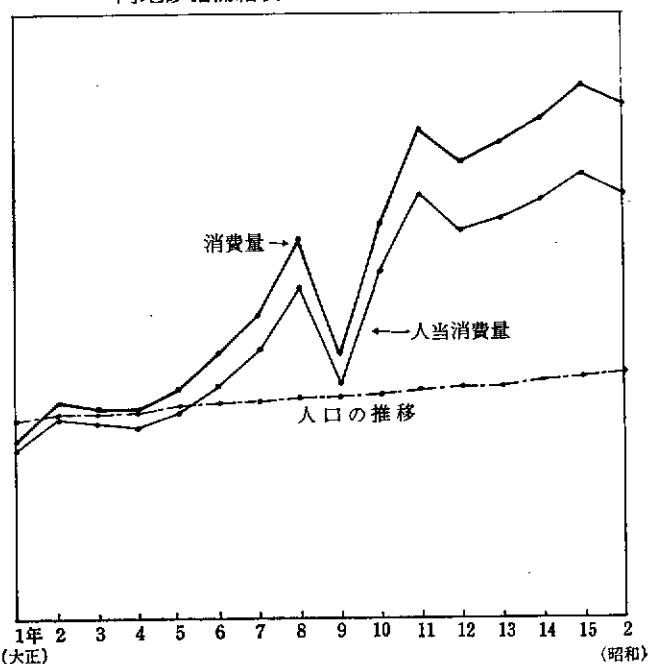
年次別	内地生産		輸入	移入	内地消費	一人当消費
	大正元年	二年				
一〇三・九三	三七・四五	二七四・一六	一〇九・四七五四五	一〇二・七二五三七・七三	四五〇・九七	八・七一斤
一〇四・八六三七二・五四	一〇三・五五	一〇一・五七一・三三	一〇一・一七三三一・三四	一〇一・七二五一〇・六九	一〇一・五七一・三三	一〇一・三三
一〇五・九五〇・二七	一〇二・五六	一〇一・五七一・三三	一〇一・二二二六〇・一九四二四・八五	一〇一・二二二六〇・一九四二四・八五	一〇一・六九	一一・六九
一〇六・六六一・三二	一〇一・五六	一〇一・五七一・三三	一〇一・二二二六〇・一九四二四・八五	一〇一・二二二六〇・一九四二四・八五	一〇一・九六三	一一・九六三
一〇七・七三	一〇一・五六	一〇一・五七一・三三	一〇一・二二二六〇・一九四二四・八五	一〇一・二二二六〇・一九四二四・八五	一〇一・九六三	一一・九六三
一〇八・六九	一〇一・五六	一〇一・五七一・三三	一〇一・二二二六〇・一九四二四・八五	一〇一・二二二六〇・一九四二四・八五	一〇一・九六三	一一・九六三
一〇九・六九	一〇一・五六	一〇一・五七一・三三	一〇一・二二二六〇・一九四二四・八五	一〇一・二二二六〇・一九四二四・八五	一〇一・九六三	一一・九六三

これでみると大正元年の一人当たり消費八・七斤が、大正八年には一六・七斤にふえている。これは大戦景気が素晴らしかつたことを端的に示す数字であるが、翌年にはそれが三割強減少している。これは戦後反動恐慌のすさましかつたことを示すものであるが、翌年から再び上昇に転じた需要

砂糖の1人当平均消費高表(大正1-15年)



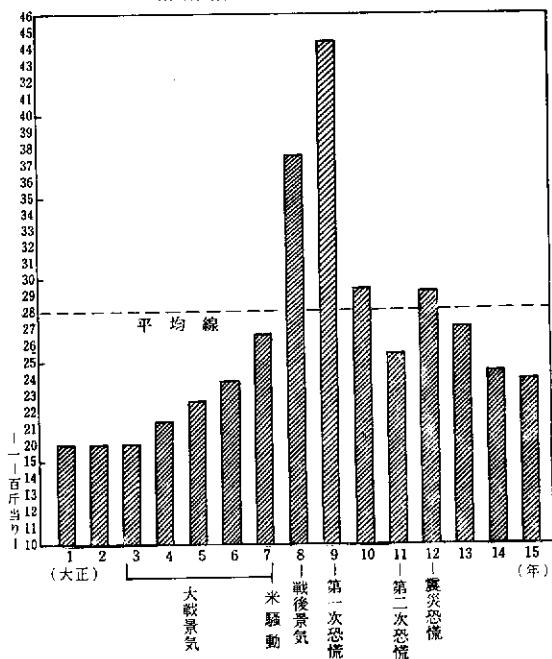
内地砂糖需給表（大正1年～昭和2年）



は大正十五年に一人当たり二二・一斤に達した。大正元年を一〇〇とするとき、これは二五四である。当時は砂糖の消費量が文化水準を知る尺度として用いられていて、そういう点からいつて大正文化の成長はすばらしかったということになるが、菓子パンはこの砂糖の需要の成長とそのあゆみを共にしたのである。

つぎに内地産糖、外地産糖（主として台湾）と輸入糖の関係をみると、内地産糖は横ばいで、増加したのは移入糖と輸入糖であった。その移入糖が輸入糖を決定的に引きはなしたのは昭和に入つてからであるが、それが台湾糖の手厚い保護政策によつてもたらされたことはいうまでもない。

精糖相場表（大正1年～15年）



以上の通りであつて、糖価が急上昇にうつったのは大正八年の戦後景気であり、その激落がはじまつたのは翌九年の下半期からであつた。

年次別	大正元年														
	八七六五四三二一年					大正九年					昭和二年				
年次別	平均相場 (百円当)														
平	20.5	21.4	22.3	22.2	22.2	21.1	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0
均	20.0	21.0	22.0	22.0	22.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0
大正	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0
九	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0
二	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0	21.0

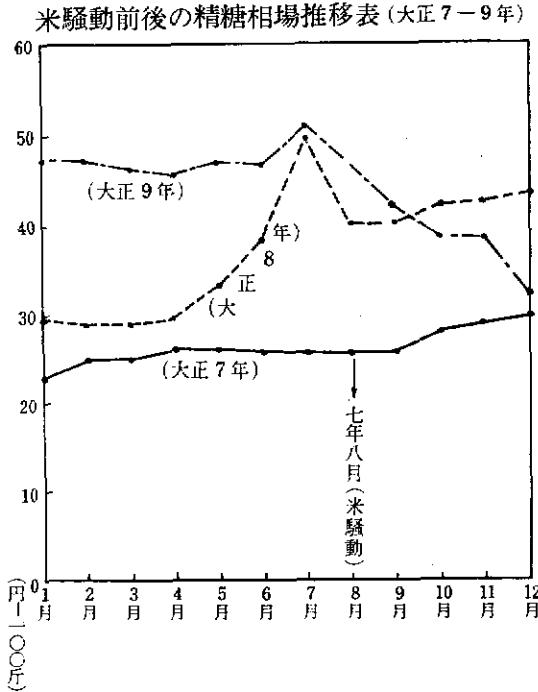
精糖相場推移表（東京）

菓子パンが戦争景気の波にのつて比較的順調にのびたのは大正八年の四月までであり、それ以後は原料高製品安と相次ぐ戦後反動恐慌による需要の減退になやまされたが、こうした業界の不況に拍車をかけたのは砂糖業者の価額協定であつた。

(c) 米騒動前後の糖価の推移

この激動期の砂糖相場の月別推移は別表グラフ記載の通りであつて、これによると糖価の狂騰がはじまつたのは戦後景気はなやかなりし大正八年の四月以降であり、それが頂点に達したのは同年七月であつた。翌月にはそれが激落したが、それから再び上りはじめ、それが頂点に達したのは翌九年の七月であつた。それが激落に転じたのは第一次戦後反動恐慌のためであるが、大正九年七月の百斤五十一円二十六銭が十一年九月には二十一円五十四銭まで下つた。

このような相場の激動がパン業界に及ぼした悲喜劇にはパンの部で詳しく言及する。なお、この大正期の糖業界のうごきを年譜として示せば次の通りである。



精 糖 関 係 年 譜

年次別	月日	事項
大正三年	七、二八	第一次世界大戦 未曾有の大戦景気の起点
大正四年		この年から砂糖の一人当消費高度成長にうつる
大正五年		台湾糖工場の新設停止命令撤廃
大正六年		砂糖消費量からみた大戦景気の頂点
大正七年		二月を頂点として相場激落
大正八年		糖価暴落で増田增蔵商店破綻し、安部幸商店も整理に入る
大正九年		
大正十年		砂糖暴落 業界協定で糖価引上げ
大正十一年		不況対策としての操短休業統出 糖価協定成立
大正十二年		砂糖減産協定成立
大正十五年	一、三、二九	震災による消失糖一一三万ピクル 精糖販売協定成立

第十二節 糖業資本の成長と糖価引上げ

以上は価格と数量面からみた大正時代の砂糖の概況であるが、ここで視野を転じて糖業資本のその後の様子をみると、大正四年以降の需要の急速な伸びを反映して糖業資本がその実力を飛躍的に増大していくことが印象的である。

いま試みに大正九年現在の大手製糖九社の成績をみると、次表の通りである。

大手製糖九社の営業成績（大正九年）

区 分	払込資本金	総 収 入	利 益 金
大日本製糖	一八、三八四千円	九九、六千八百円	一五、八八二千円
台湾製糖	二九、五〇〇	六二、一八八	二六、八三二
明治製糖	一二、〇〇〇	四五、九七四	一一、五一六
塩水港製糖	一四、六八七	四四、三三四	一二、六二五
東洋製糖	一八、四七五	一七、七八三	（二）一、六五八
新高製糖	一〇、七五〇	一一、二九四	一〇、八一六
帝国製糖	一四、八二四	三〇、六四九	四、九一五
台南製糖	一三、三七五	一九、二七四	三、〇七八
南滿州製糖	〇〇〇	三、一〇三	三五三

以上の通りであつて、主力は日糖、台糖、明糖、塩水港、帝糖の五社であるが、これらの大企業は払込資本金の総額に近い巨大な利益を挙げている。

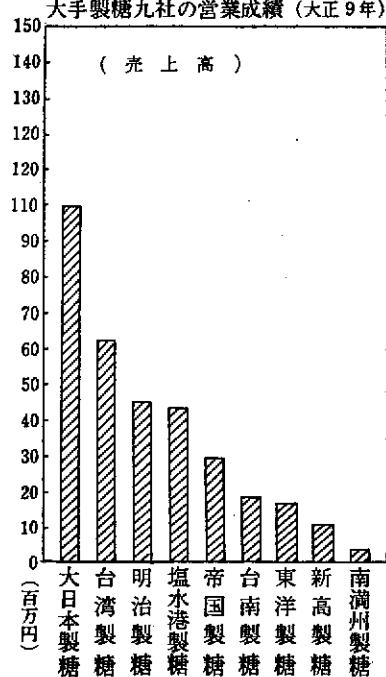
いうまでもなくこれはこれらの製糖資本が政財界の有力方面と結びついていた為にあげ得た巨大利潤であつて、その主なる結びつきをみると、日

糖は財界の巨頭藤山雷太と結びついており、台糖は三井物産、宮内省、明糖は三菱合資、第一銀行、塩水港は安部幸、鈴木商店、帝國製糖は安部幸島津、松方、安田銀行、第一銀行などむすびついている。

つぎにこれが販売網をみると、台糖は三井物産、日糖は三井物産、鈴木商店、明糖は三菱商事、明治商店、塩水港は三井物産、安部幸、鈴木商店帝糖は鈴木商店といった結びつきであつて、何れも第一級の商事会社である。これらはすべて特約店または代理店であつて、この下にそれぞれの会社別に問屋—卸商—小売商が系列化されていったのである。

このような第一級の金融資本、産業資本、商業資本のドル箱となつた大

大手製糖九社の営業成績（大正9年）



手製糖業がその利益を確保するために生産および価格の協定に敏感であつたことはいうまでもないが、そのような生産販売協定がはじまつたのは、大正九年の糖価暴落がそのキッカケであつた。この年の七月には糖価(卸)が百斤当り五一円二十六銭まであがつたが、これを頂点として糖業界も反動恐慌の嵐にまきこまれて行つたからであるが、記録によるとこの年の十二月の糖価は三十二円二十三銭である。昭和三年にはそれが一〇円の線まで暴落しているが、それはともかくとしてこのわずか半年の間に約四割に近い暴落をみたことは、わが世の春を謳歌した糖業界にとつても大変ないたであつた。

それはこの恐慌で明治製糖代理店の明治商店（増田増蔵）が破綻し、安部幸商店も整理会社となつたことからも知ることができる。しかし大手業者には価格を人為的に釣り上げる手がある。そこで翌大正十年六月には製糖協定價格の引上げが決定した。それ以来あの手この手の糖価引上げ措置が講ぜられたのであるが、いま大正時代に行われたその主なるものを箇条書として示せばあらまし次の通りである。

糖価協定の年譜（大正時代）

年次別	月	事項
大正一〇年	五	糖価本年度の新安値 業者間協定による糖価引上げ決定
一一年	六	新糖価協定成立
一五年	七	砂糖減産協定成立 砂糖販売協定成立

以上が大正時代に採られた糖価釣り上げのための業者間協定の主なるものであるが、大正十五年三月二十九日に関税定率法が改訂されて、その関税率が大幅に下つたにも拘らず糖価が下るどころか反つて上つたのは、価格協定が行われたからであった。

とまれこうして金融、産業、商業資本の連合軍によつて自己の利益をまもりぬいた大手糖業者は、その実力を着実に伸ばしていく。そしてその余力でもつて着々と関連事業部門へとその巨大な触手をのばしていくのである。いまここでそのすべてに言及する必要も余裕もないが、パン業界と関係の深い分野への進出を挙げると次の通りである。

◇：明治製糖 明治製糖が資本金百五十万円の大正製菓を創立したのは大正五年であつたが、同社の三十年史をみると「砂糖をもつて原料とする工業といえど、まず製菓事業をもつて最たるものとす」と記されている。この大正製菓は翌年東京菓子と合同、大正十三年明治製菓と改称したが、終戦後明治パンを創立してパン業界に進出した。

◇：台湾製糖 台湾製糖は昭和十一年森永製菓と折半出資の森永食品工業を創立したが、十七年に森永製菓へ合併された。

◇：日甜 大正九年資本金一千万円の日甜が創立されたが、同社がインスト部門に進出したのは昭和十六年であった。

第十三節 恐慌が生んだ悲喜劇

以上は大正期の米穀、小麦粉、砂糖業界の推移のあらましであるが、大戦景気の結果、惹起(じやつき)した米そうどうは全日本を震撼したが、その後につづいておこつた第一次及び第二次反動恐慌並びに震災恐慌による経済界の打撃も大きかつた。

従つてパン業界もこうした大きな時代の波にもまれて浮沈をくりかえしたが、ここで大戦後にこの国をおそつた大経済恐慌がもたらした悲喜劇に若干言及しよう。

周知の通りこの大戦後の反動恐慌は、日本中いたるところで数限りない悲喜劇をもたらした。それは第一次大戦がもたらした未曾有の好況の波にのつて株や相場に手をだしたり、売り惜しみ買い溜めに豪華身をやつしていた漏れ手に粟の大小無数の成金の多くが戦争直後に訪れた価格の暴落とその後につづいた第一次、第二次反動恐慌によつてペタペタと倒れていくだからである。

ここでの問題はそれがパン業界や製粉業界にどのように波及したかであるが、中村屋の開祖相馬愛蔵はこの点に次の通り言及している。

「大正四年から八年までの五年間は、歐州大戦の影響をうけて物価暴騰し、またその後は急落して昨日の成金は今日その居処さえ失うという有様で、我々のような小売商の中にも騰落に際し方針を誤つたために、多年の信用を一朝にして失い、閉店倒産したものが數くなつた。(略)我々の同業者の中でも景気にのつて思惑買をして一時に大いに儲けたものもあつた。何しろ当時は一俵二十二円であつた砂糖が、三十円になり、四十円になり、終には五十五円にまであがり、この調子では七十円位まで行くかも知れぬと予想されたものであつた。そこで五十余円の砂糖を幾百俵も買つて予想の高値をあてこんだ同業者があつたが、氣の毒にも次ぎに来たものは滅茶苦茶な暴落であつた」と。

日本製粉破綻の素因をつくった鉢木商店が、破綻の禍根(かこん)をつく

つたのも所属の大里製粉所が原料小麦の思惑買をして大穴をあけたからであり、我国最初の機械化パン工場日本食糧(株)が破綻して、その主宰者土岐章氏が失意のかなしみを胸に秘めて外遊したのもすべてこの思惑買の失敗に因るものであるが、これについてはあとでもう一度言及する。

しかしすべての人が思惑だけがをしたわけではなく、中には堅実な手法でこの危機を切りぬけたものもあつた。中村屋もその一人であつたが、店主の相馬愛藏はこの点に次の通り言及している。

「私は最初から思惑買はさておき、実際に使用する砂糖でさえも買置きをせず必要量だけを購入してこの変則の場合を凌いでいたので、五十五円が一時に三十円まで下落した際も、私のところには一俵の手持もなかつた。つまり不当の利を得ようとしなかつた代りに損をせず、直ぐに安くなつた砂糖を使うことができたのである。むろん私は世間で投機熱が如何に流行しても、株に手を出すなどということはなかつたからこの急落によつて少しも打撃を被ることもなく、従つて中村屋は安泰であつた」と。

こうした思惑で失敗した人々に対して世間の同情は多くの場合殆んどなかつた。

へんな心(リゴレット替歌—啞蟬坊詞)抄

△株がさがる 株がさがる

小気味よくも 株がさがる
成金どもが 泣いて狂い

首くるも 因果応報

△株がさがる 株がさがる

小気味よくも さがるよ あ……あ
さがるよ

これは当時の一般庶民の気持をそのまま表現した演歌だつたということができよう。しかしこの恐慌によつて破綻した人々の行動のすべてが世間の非難と嘲笑を買つたわけではなく、中には襟を正さしめるような立派な行動をとつた人もあつた。

その中の一人が茂木商店の社長茂木惣兵衛であり、いま一人は倉紡社長の大原孫三郎である。茂木合名会社は生糸貿易の豪商で、その資産は当時の金で五千萬円といわれたものであるが、父が死んだ為に八高を中退して家業を継いだ三代目惣兵衛は、店員を集めてこう語つた。

「私は茂木の長男だつたために、偶然茂木家の全資産を継承したが、これは店員諸君の汗の結晶である。従つて私は店員各位の生活を保証し、その幸福を増進し何かの意味で社会の進歩に貢献したいと思う」と。

彼はこうした立場から封建的な雇用関係を改革し、ひとに先んじて一日八時間、一週四十八時間制を採用した。しかし大正九年三月十五日の第一次反動恐慌で生糸が暴落し、さらに彼が重役をしていた七十四銀行(いまの横浜銀行)が取り付けざわぎをおこして休業すると、彼は決して逃げかくれせず、私財の全部を投出して身一つになつた。

こうして丸ソ裸になつた茂木は、大正十二年渡英、ロンドン大学政経学部の一学生となつて資本主義の罪悪をこの世から一掃する方法を研究した。彼の最後の著作は「来るべき世界の姿」であつたが、茂木が帰国したのは昭和八年、亡くなつたのは翌九年であつた。

いま一人は資本家として誠実に生きる道は何かを真剣に探究した倉紡二代目社長の大原孫三郎である。彼は米騒動を機会に社会悪を一掃するための方法を真剣に研究することを発意した。そして大原社会問題研究所、大原労働科学研究所、大原農業研究所などをおこしたが、これが社会科学の進歩に大きく貢献したことはひろく人の知るところである。

しかし茂木や大原のような生き方をした人はまれであつた。だから成金の没落に拍手する演歌がはやり、米そどうと反動恐慌の嵐の中から封建的な徒弟制度の崩壊と近代的な労働運動が芽生えて行つたのであつて、大正十五年の暮に労資協調をねらつた大日本パン友会が誕生するに至つたのも決して偶然ではない。

大正七年の米そうどうを契機として食パンを内地米の代用食として普及する官民挙げての運動がおり、陸軍が一週一回以上パン食を採用してこの運動の先頭に立つたイキサツには、あとで詳しく言及するが、こうしておこつた食パンブームはジャム工業の成長発展を促す原動力となつた。左記は大正期ジャム産業の略年譜である。

ジャム工業略年譜（大正時代）

年次別	事	項
大正三年	丸三ジャム信州から進出、浅草清島町に工場及び営業所を建設	兵庫県鳴尾で苺ジャム製造（契約栽培）
大正五年	伊予吉田町の朝家万太郎マーマレードをつくる	日本ジャム（株五〇万円）設立され、四谷信濃町に工場建設
大正七年	この頃からリング、アンズ、イチゴのボイル製造はじまる	東京に科野ジャム製造所誕生
大正九年	長野県に更級杏ジャム製造所誕生、昭和三年寿商会と改称	東京にジャム同業組合誕生するも丸三これに不参加
大正十年	丸三ジャム雷門に移り大缶ジャム界に進出	東京にジャム同業組合誕生するも丸三これに不参加
大正十一年	日本ジャム丸三との競争に敗れ解散	丸三ジャム雷門に移り大缶ジャム界に進出
大正十四年	兵庫県の苺ボイル業者初の価格協定	日本ジャム丸三との競争に敗れ解散
大正十五年	大阪のマルキ号パンがジャムの自家生産開始	兵庫県の苺ボイル業者初の価格協定
昭和二年	大阪ジャム協会誕生（組合員五人）	大阪のマルキ号パンがジャムの自家生産開始
昭和五年	相馬正胤イギリスより帰朝、東京西落合に相馬黒実缶詰研究所をおこし、イギリス風ジャムをつくる	大阪ジャム協会誕生（組合員五人）
昭和十年	この年より昭和十五年までジャム缶詰の輸出つづく	相馬正胤イギリスより帰朝、東京西落合に相馬黒実缶詰研究所をおこし、イギリス風ジャムをつくる

こうしてジャム産業の近代化の礎が築かれたのであるが、このボイルに着眼したのは東京ジャム組合の初代組合長山中平作であつたとする説もある。その説によると山中が杏ボイルに思いついた動機は、乾し杏を水にもどしてもりつぱなジャムをつくることを発見したからだといふ。一見何でもないことのようであるが、これは一つの大きな技術革新であつた。山中についで杏ボイルをつくったのは丸三ジャムだといわれている。

何れにしてもこのころから年中ジャムがつくられるようになり、そのため近代的なジャム企業が生れることになつたのであつて、その代表的なものは大正三年に信州から東京に進出した丸三ジャムであつた。ところが技術革新の結果年中ジャムがつくられることがわかると、これを工業的に大量生産して代用食パンブームの波にのろうという企てが続出したのである。

その代表的なものに大正七年に資本金五十万円をもつて設立された日本ジャム株式会社がある。この甲州出身の佐藤泰作を社長とする会社は、東京四ツ谷信濃町に当時は誰も手をつけていなかつた蒸気炊き方式の近代的工場を建設して、一足先ぎに東京市場に進出して地盤をきずいていた丸三ジャムに挑戦した。こうして両社ははげしい販売競争を展開したのであるが、近代的会社経営による日本ジャムは、諸経費が高くついた為に次第に丸三に押され大正の終り頃解散してしまつた。その結果日本ジャム系の人々が独立してジャム屋を相次いで開業したが、これらの人々は採算を無視した競争の愚を悟り、大正十年に初の東京ジャム同業組合を結成した。しかし肝心の丸三がこれに参加しなかつたので、組合は親陸機関の域からぬけだすことができなかつた。日本ジャムとのたたかいに勝つた丸三が工場

大正期のジャムにとつて特記すべきことは、大正七年の米そうどう前後

を浅草雷門につつして、そこで大缶ジャム界に進出したのは翌大正十一年であつたが、こうしてジャム企業も次第に軌道にのつていったのである。大阪にジャム組合がつくられたのはそれから六年後の昭和二年であつたが、当時の組合員は五人であつた。

なお、苺ジャムやマーマレードがつくられたのは第一次大戦初頭のことであり、(木村屋総本店等)相馬子爵の嗣子相馬正胤氏がイギリスでまだ純英國風のジャムを売り出すため、東京西落合に相馬果実缶詰研究所をおこしたのは昭和五年のことだつた。

業界の過当販売競争をなくする目的をもつて兵庫県鳴尾の苺ボイル業者が販売協定をはじめて行なつたのは大正十四年のことだつたが、その効果があつたかどうかはよくわからない。昭和十年から十五年にかけて国産ジャムの輸出がおこなわれたが、それは台湾糖の価格が割安になつた結果であつた。

第十五節 大正時代の洋菓子界

昭和十六年に食管法が制定公布され、パンはこの法律の規定にもとづいて「主要食糧」として扱われることになつた。こうしてパンと菓子の業態分離が実現したのであるが、それまでのパンは菓子産業の一部として扱われていた。実際問題としていまでもパン専門の企業は殆んどなく、大部分は製菓を兼業している。ただ昔といまどちがうところは、昔にくらべるといまのパン屋は昔よりもパンの生産比率がはるかに高くなつてゐること位である。そんなわけで製パン業と製菓業は密接不可分唇歯輔車(しんしほしや)の関係にあるのであるが、パンと菓子の製造業者の分離独立が大きくすんだのが大正時代であつたこともまた歎然たる事実である。

大正時代に洋菓子王国を築きあげたものに森永製菓と明治製菓があるが、この両社はビスケットを含む洋風乾菓子部門に、確乎不動の地歩を築きあげることに成功したばかりでなく、余勢を駆つて乳業部門にまで進出、乳業界制覇の基礎を確立したのである。その結果、生パン業界はその販売部

門の一環として再編成されることになつたが、こういう結果になつたのは森永・明治が未曾有の戦争景気の波にのつて洋風乾菓子類の全国的販売網をつくり、さらに進んでその輸出部門を拡大したことと、機械化大量生産方式を導入して生産性の飛躍的向上に成功したことによる。この点は大正八年に川崎造船と共に森永・明治の両社が相次いで八時間労働制を採用するという劃期的業績を挙げたことによつて議論の余地がない。

なお森永・明治の飛躍的進出の背景に、金融資本と産業資本の強力な支援があつたこともここで特に指摘しなくてはならない。周知の通り森永製菓の強力なスポンサーは、大阪で飛び鳥落す勢だった北浜銀行の頭取岩下清周であつた。また明治製菓の主力が日糖、台糖に次ぐ有力糖業資本の明治製糖であつたことは改めて説明するまでもなかろう。

生パンと洋生の分離が決定的になつたのもこの大正時代であつた。この大正期に頭角を現わした洋生専門業の代表的なものに藤井林右衛門の不二屋と門倉国輝氏のコロンパンとドーナツから帰化したユーハイムなどがあるが、これらの人々は新しく抬頭した喫茶業と洋生菓子をむすびつけて高級洋菓子部門を開拓していくのである。その結果ベーカリーの洋生は大衆むき、喫茶店の洋生は高級むきというイメージが次第に形成されていったことは、その後の業界のうごきによつて知ることができる。

一体資本主義経済の高度化につれて、それぞれの分野で専門化が進行するということはあたりまえのことであつて、別に珍奇な異変でも何でもないが、未曾有の大戦景気がこうした業界の分化を促進する役割を期せずして果すことになつたのである。

以上は大正期の洋菓子界の概観であるが、個々の内容に言及するまえにこの時代の洋菓子界の略年譜を示せば、あらまし次の通りである。

洋菓子関係年譜（大正三年—昭和十四年）

年 次 别	月 日	事
大正三年	七、二八	第一次世界大戦勃発

東京のビスケット業者廿日会を結成

この年森永本ケツ用の十錢及び五錢充りミルクキヤラメルを発売また新設の田町工場で輸出用ビスケットの製造開始

大正四年

九

森永製菓全国に特約店制度を採用洋菓材料商桜井源喜商店開業

大正五年

一〇、九

東京菓子(株)創立(資本金百萬円)

大正製菓(株)創立(資本金百五十萬円)

大正六年

一一、六

「今日は三越あすは帝劇」流行語となる

大正・東京両製菓合併して大正製菓となる(明治製菓の前身)

明糖社長相馬半治房総乳業を傘下に入れる(明乳の前身)

日本煉乳(株)創立(森永乳業の前身)

歐州大戦終了、シリヤ出兵、米騒動

岩崎清七日東製菓を創立(資本金百萬円、翌年日粉社長となる)

大正七年

一二、二二

第一次戦後反動恐慌

戦後景氣

森永製菓七割五分、東洋製菓六割五分、日清製粉五割五分配当

長榮軒名古屋製菓(ビスケット)を買収する

森永・明治相次いで八時間労働制を採用する。

第一次戦後反動恐慌

日本郵船調理人養成所を設立する

大阪で木村屋製菓と大正製菓ビスケット濫充戦を展開する

開する

相場・思惑に失敗して倒産する食品業者続出
大正製菓(明治製菓)房総煉乳を合併

佐久間製菓創立(資本金二百万円)

森永関西塚口工場で国内向けビスケットの量産開始
ユーハイム永住を決意して横浜で開業する

カルケツト新発売

グリコ新発売

第一次戦後反動恐慌

菓友会誕生

不二家横浜伊勢崎町に進出する

大阪に合名会社江崎創立

関東大震災、震災恐慌

第一次戦後反動恐慌

東洋一の森永製菓鶴見工場竣工東京で門倉国輝ヨロシバノ創業

大正八年

一二、一四

第一次戦後反動恐慌

東洋一の森永製菓鶴見工場竣工東京で門倉国輝ヨロシバノ創業

第一次戦後反動恐慌

第一次戦後反動恐慌

第一次戦後反動恐慌

第一次戦後反動恐慌

第一次戦後反動恐慌

第一次戦後反動恐慌

第一次戦後反動恐慌

第一次戦後反動恐慌

第一次戦後反動恐慌

大正九年

大正十年

大正十一年

大正十二年

大正十三年

大正十四年

大正十五年

大正十六年

大正十七年

大正十八年

大正十九年

大正二十年

大正廿一年

大正廿二年

大正廿三年

大正廿四年

大正廿五年

大正廿六年

大正廿七年

大正廿八年

大正廿九年

大正三十年

五 六

九、一〇

九、一

九、一

八

第一次戦後反動恐慌

第十六節 大戦景気とビスケット業者の濫立

以上が大正期洋菓子界の略年譜であるが、まず第一に挙げなくてはならないのは、これまで生パン業とともに深いつながりをもつていたビスケット業界の変化である。

東京のビスケット業界の不況による需要の低下と、精糖カルテル（明治四年結成）と製粉カルテル（明治四四年結成）による原料高製品安の苦境から脱却することを目的として、廿日会なるものを結成したのは大正三年の春であつた。

ところがこの年の七月末突如として第一次世界大戦が勃発した。そのため経済界は一時は大動盪し、森永製菓のスポンサーであった北浜銀行が支払を停止するといつたさわぎもあつたが、翌四年から未曾有の大戦景気が訪れ、ビスケット業界もこれによつて危機をのり越え、わが世の春を謳歌することになつた。こうして森永・明治をはじめとして大小多数のビスケット業者が濫立する結果となつたのであるが、戦後の反動恐慌は需要の激減をもたらした。こうしてはげしいビスケットの濫売合戦がはじまつたのであるが、このたたかいは昭和初頭までつづいた。そしてこうした販売競争の結果、弱少ビスケット業者と生パン兼業のビスケット業者の多くが淘汰されて森永・明治両社のビスケット業界制覇が確立したのであるが、以下はこうした変化の過程の素描である。

第一次世界大戦がビスケット業界に及ぼした影響について「ビスケット工業史」は次の通り言及している。

「日露戦役を境として一般にビスケットの需要は増大しつつあつたが、

この産業が本格的に近代工業化されたのは第一次大戦時代であつた。特に大正六・七年以降は単なる輸出による需要の増加のみならず、内需のいちばんしい増大を反映して大いに販路が拡張された。その結果（略）東洋製菓などもビスケット窯を三台に増加し、のち更に五台にふやして生産力の拡大をはかつたが、それでも生産が間に合わぬ程の好況ぶりを示し、最好況期には株主への配当が毎期五割、最高六割五分というような成況であつた。（略）このころになると高級ビスケットが羽根がはえてとぶようによく売れるようになつた。当時の生産者といえば東洋製菓、かにや、長井商店、木村屋製菓、中央製菓、三河屋総本店、日本製菓（横浜）、大阪製菓、中村組（姫路）などがあるだけで、数的には極めて寥々たるものだつた」と。

明治初頭に米津風月堂がビスケットの機械化生産をはじめたときは予期に反して売れなかつた。また日清戦争後東洋製菓が東洋一のビスケット工場で英國風ビスケットを売り出したときは、こんな石鹼臭い菓子はご免だとそつぽをむかれた。それがこの大戦を契機として急に變つたのは、それまであまり売れなかつた森永のミルクキヤラメルが羽根が生えてとぶようになり売れだしたのと同じ理由によるものである。その理由は何かについて一口にいふことはむずかしいが、一つの理由はこのころから食物は栄養的合理的衛生的でなければならぬという観念が拡がつていつたことであり、いま一つは舶来品礼讃ムードが戦争景気の波にのつたことであろう。しかしそれよりも大切なことは戦争景気で国民生活に余裕ができ、若い世代の多くが洋風菓子の新しい需要層として浮び上つてきしたことであつた。

ともあれこうして戦争景気の波にのつて洋菓子の需要がのびてくると、各方面がビスケット企業に注目するようになり、やがてビスケット会社の濫立時代を迎えることになつた。

大戦勃発後いちはやく設備拡張にふみきつたのがビスケット専門の東洋製菓であったことは前述の通りであるが、森永製菓も大正四年一月から芝田町工場でまず輸出向ビスケットの生産を開始した。これにたいし大正製

菓（明治製菓の前身）が東京大久保工場を完成して、キヤラメル・ビスケット・キャンデーなどの大量販売にのりだしたのは大正六年の暮であつた。

こうして森永と明治の競争の火がともかく燃えられたのであるが、森永が大勝利工場でもビスケットの生産をはじめたのは大正九年であつたが、同社は翌十年大阪塙口に三階建延二千坪弱のビスケット工場を建設、さらに拡充体制をととのえた。そして大正十二年には横浜の鶴見に五万坪の敷地を購入東洋一の製菓工場を建設、ここにまでビスケットの量産をはじめたのは大正十四年の春であつた。

これにたいし明治製菓が川崎の明治製糖工場隣接地に鉄筋コンクリ四階建工場等六棟を建設、ここでビスケットその他洋菓子の集中生産に入つたのは大正十五年の春であつた。

こうして大正時代の末期には森永・明治両社による洋菓子業界制覇の体制が確立したのであるが、昭和四年七月現在のビスケツ・会社の勢力分布を示せば次の通りである。

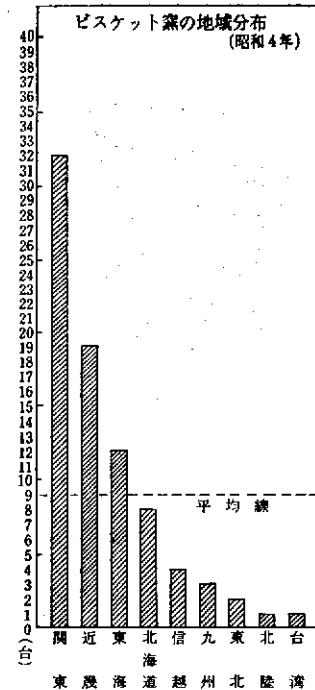
ビスケット会社の現況（昭四・七現在）

社名	東洋製菓(関東)	森永製菓(塚口工場)	木村屋菓菓	中冰水明三	A昭	力
地方名	東京	東京	東京	東京	東京	東京
臺數	一六三三五一一二五一	一	一	一	一	一
社名	日本製菓	東洋堂製菓	日清製菓	函館製菓	帝國小菓	山田製菓
地方名	横濱	甲府	札幌函館	北海道	東北	仙台
臺數	一	一	一	一	一	二八
社名	明治製菓	中央製菓	見江製菓	屋菓製菓	河製菓	B和製菓
地方名	東京	東京	東京	東京	東京	東京
臺數	一	一	一	一	一	一

以上の通りでこれが地域別分布をみると次の通りである。

(社) 森永大阪塚口工場の能力は関東の部にふくまれる。

このようにビスケット会社が温立したのは、関東大震災のため関東の業者が大打撃をうけ、容易に再起できまいという見通しの下に、その地方地盤にいくこむ好機とみて各地に新設計画が進捗した為であつた。
なお各社の生産力をみると、上位六社は次の通であつて、これが全体の約五〇%を占めている。



上位六社の能力比較

社名	所在	オーブン台数	比率
森永洋製菓	東京	一三台	一五・八%
東洋製菓	東京	六台	七・三
明治製菓	東京	五台	七・三
中華製菓	岡山	六台	六・一
帝國製菓	東京	五台	四・九
その他	北海道	三台	四・七・五

そして第一次大戦当時羽振りのよかつた大阪製菓と中村組は過当販売競争の結果、共にその姿を没しており、パン業界とつながっているものは木

村屋製菓と日本製菓（木村屋総本店）と三河屋製菓だけというありさまで何れも大手から大きく引きはなされてしまつてゐる。また名古屋第一の老舗生パン屋の長榮軒（伊藤長吉）が経営不振に陥つたビスケット屋名古屋製菓の設備を買収して、ビスケットを兼営したのは大正八年の暮であつたが、大正末期にはビスケット部門を放棄している。これが濫売戦の結果であることはいうまでもない。

ビスケットの濫売戦がはじまつたのは、戦後第一次反動恐慌がおそつた

大正九年の七月であつた。東京に本社をおく東洋製菓と木村屋製菓が、大阪を中心に行開した濫売戦がその代表的なものであつたが、当時の新聞記事によると「互に奇策を弄し名案を求めて」はげしい競争となつたとあります。これは森永製菓の大坂塚口工場がビスケットの量産をはじめるまえに少しでも自社の市場占拠率を拡大しておきたいという思惑もあつての競争であつたが、八月末には仲介者があつて両者の手打式がおこなわれた。しかし大正十一年には第二次反動恐慌、翌十二年には震災恐慌といつた工合で景気は少しも好転しない。それなのに大正十四年には森永の鶴見工場が竣工し、翌年には明菓の川崎工場が竣工して、共にビスケットの量産をはじめた。そのため大正十三年ごろから再びビスケット濫売戦の火蓋を切られたのであるが、これは昭和時代に入つてからさらに激化した。そこで業界の協調がとなえられて、大正二年五月十七日に三十三社加盟の全国ビスケット協会の誕生となつたのであるが、これには大手の森永・明治が参加しなかつた。そのため濫売競争は一段とはげしくなつたが、これに拍車をかけたのは製粉業者の濫売戦であつた。耐え切れなくなつた大手製粉の日清・日粉が合同劇を演じたのは大正十五年の秋であつたが、これもドタン場で失敗、遂に日粉の救済融資から金融恐慌にまで発展するに至つたのである。それはともかくとしてこうした濫売戦の結果、森永、明治の業界制覇が確立し、老舗の東洋製菓も往年のおもかげを止めないことになつたが、それが金融資本や産業資本につながる企業の強みを示すことはいふまでもない。

第十七節 森永・明治王国の建設

大正時代のビスケットをのぞく洋菓子界一般の大勢をみると、洋乾菓子部門の異状な発展と洋生部門専門店化の進行が印象的である。いうまでもなくこれは第一次世界大戦がもたらした好景気の落し子であるが、戦後におとずれた反動恐慌にも拘らず洋風菓子は次第に和菓子の領域にくいこんでいた。

いまこのような食生活洋風化現象の波にのつて大正時代に頭角を現わした主なる洋菓子企業を拾い上げてみると、あらまし次の通りである。

乾 洋 菓 子 部 門

社名	創立	備考
森永製菓	明治三二年	輸出分野を開拓
東洋製菓	明治三三年	
日本製菓	明治三四年	
明治製菓	明治三五年	
日東製菓	大正七年	
今村製菓	同右	
三共製菓	大正九年	
佐久間製菓	大正十一年	
江崎	同右	
古谷製菓	大正十二年	
渡辺製菓	大正十四年	
洋生菓子部門		
中村屋	明治三四年	
不二家	明治四三年	
ユーハイム	大正十年	
コロンパン	大正十三年	
東京	横浜	東京

は森永製菓と明治製菓であつた。そこでここに両者の略年譜を示せば凡そ次の通りである。

森永製菓略年譜（大正終まで）

年次別	月	事項
明治三二年	六八	森永太一郎滯米一年洋菓修業を終えて帰京
明治三三年	四八	赤坂溜池に二坪の森永西洋菓子製造所を開設
明治三四年	四八	溜池表通りに進出、三府六港に販路拡張
明治三五年	一〇	宮内省納入、朝鮮に拡売
明治三六年	二八	工場半焼
明治三七年	一八	赤坂田町の新工場に移転（一六一坪）
明治三八年	一八	工場を二階建とする
明治三九年	一一	松崎半三郎入店支配人就任
明治四〇年	一二	時事新報に一頁広告
明治四一年	一二	大阪支店設置
明治四二年	一二	米人技師ロバート・ゲーザー招聘
明治四三年	一二	（株）森永商店設立（資本金三〇万円）
大正元年	一九	北浜銀行頭取岩下清周相談役に就任
大正二年	一六	輪出菓子製造開始
大正四年	一九	森永製菓（株）と改称
二二	一九	キヤラメルにミルクの頭字を入れる
	一九	芝田町工場で輪出用ビスケット製造開始
	一九	この頃ボケット用ミルクキヤラメルのにせもの統出
	一九	全国に特約店制度を布く
	一九	東京市内で飛行機宣伝

以上の通りであつて、これでみると東京と横浜がこの時代の洋菓子の拠点だつたことがわかる。

そこです洋乾菓子部門からみてみると、何といつてもこの部門の花形

森永ミルクキャラメルを登録

外国から注文殺到

大正五年
大正六年

大正七年

大正八年

輸出向ドロップ製造開始
愛國煉乳を合併日本煉乳を設立
資本金六十万円となる。

大阪工場竣工
田町工場内にチョコレート工場竣工

資本金九十万円となる

森永煉乳発売

資本金一二〇万円となる

八時間労働制を採用する

資本金一四〇万円となる

資本金一六〇万円となる

日本煉乳を合併資本金二五〇万円となる

大阪工場内にビスケット工場新設

森永ドライミルク製造開始

大阪塚口工場内に三階建ビスケット工場竣工

本店を丸ビルにおく

公称資本金を三〇〇万円とする

公称一千萬円とする

関東大震災に被害僅少

鶴見第九工場竣工、ビスケット量産開始

大正十三年
大正十二年
大正十一年
大正十年

丸ビルより本社を田町にうつす
鶴見工場でチョコレート、ウエファー製造開始

年次別	月	事項
大正五年	十	東京菓子(株)創立、資本金百八十万円(払込三五万円)
		社長浜口録之助、専務大丸鉄太郎、豊多摩郡大久保百人町に工場敷地一、七三三坪を充てる
	十一	米人技師エツカーライ
	十二	大正製菓(株)創立、資本金百五十万円(払込三七・五万円)社長相馬半治
大正六年	三	東京菓子大正製菓合併、資本金二五〇万円(実権者は明糖社長の相馬半治)
	十一	大久保工場竣工
	十二	八時間労働制採用
	十三	房総煉乳を合併、三百万円に増資
大正八年	十	相馬取締役(明糖)会長に就任
大正九年	十一	市乳販売直営
大正十年	十二	明治製菓(株)と改称
大正十一年	一	大久保工場半焼
大正十二年	一	川崎新工場開設
大正十三年	一	川崎工場製造開始
大正十四年	一	川崎第一期工事完成
大正十五年	一	

二二 工場単位健保組合設立

明治製菓略年譜(大正終りまで)

以上が両社の昭和時代以前の略年譜であるが、森永が個人商店から脱皮

して資本金三十万円の近代企業としての第一歩をふみだしたのは明治四十三年の二月であった。そしてこのとき以来大阪北浜銀行頭取の岩下清周が森永の金融面を大きく支援しているが、大正時代に入つてから森永がいちはやく内需だけでなく外需の開拓に積極的姿勢をとり、これによつて大戦景気の波にのり得たのは、こうした金融資本との結び付によるものであつた。この点に森永の二代目社長松崎半三郎は次の通り言及している。

「北浜銀行との関係は頭取の岩下清周氏が明治三十六年大阪で開かれた第五回国勧業博で森永翁を知られ、その仕事に非常な興味をもたれこの事業を大いに発展せしめる必要があるという考え方で、森永の事業を後援せられることになつたからである。爾来金融方面についてはひたすら北浜銀行に頼つて事業の拡張に専念してきた」と。

ところがこの北浜銀行は第一次世界大戦勃発のときの財界混乱の煽りを喰つて閉店、岩下頭取はその責を負つて退陣した。そこで森永はその後は三菱銀行と深い関係をもつようになつたが、大正十五年には台湾製糖が株式の三割を引受け重役を送りこんできた。

資本金三十万円で明治四十三年に株式会社になつた森永が、大正十五年には公称資本金一千五百万円、払込五百万円の大会社となり、森永商店創立当時の売上年額六十二万円が、大正十五年には年額一、六五四万円という大企業に成長したのは上述のような金融資本や産業資本との結び付きに負うところが多い。

それはともかくとして、この年譜によると森永が輸出向け洋菓子の製造をはじめたのは大正元年であり、主力商品であるミルク、キヤラメルが爆発的な売れ行きをみせはじめたのは大戦景気の起点となつた大正四年であり、海外からの注文が殺到しはじめたのは翌五年であった。

こうして大戦景気の波にのつた森永が、キヤラメル原料であるミルクの

自給体制をつくりあげたのは大正六年、大阪に進出したのは翌七年、本店を丸ビルにおいていたのは同十一年、東洋一の機械化工場を鶴見に建設したのは同十四年であった。

正に爆發的高度成長であるが、こうして大量生産がきいて貯蔵性のある洋風乾菓子は、生パン業者の兼業からほぼ完全に脱却した。震災後パン業界に中生パンがとりいれられたのは、失つた乾菓子部門の穴埋めでもあつたのである。

森永の強力なライバルとして出現したのは明治製糖直系の明治製菓であつた。明治製菓の前身である大正製菓と東京製菓の誕生は大正五年であつたが、この強大な産業資本に支えられた明治製菓の売上げ実績を追いぬいたのは実に昭和八年であつた。これは長期にわたつてこの代表的洋菓子企業が製菓とこれにつながる乳業部門で壮大な商戦を展開したことを見示すものであるが、ここで明治製菓の発足から大正期のうごきを見るとあらまし次の通りである。

明治製菓の前身である東京製菓の創立は大正五年十月九日であり、これと合併した東京菓子の創立は同年十二月六日であつた。そしてこの両社が合併して大正製菓を名のつたのは翌大正六年の三月二十日であり、その名称を明治製菓に改めたのは大正十三年の九月一日であつた。そして両社合併当時（大正六）の資本金は公称二五〇万円、払込み六二万五千円であつたが、大正十五年には公称資本金五千万円、払込み六二万五千円であつて、

そこで問題はこの会社の背景であるが、この点については当事者よりもむしろライバルである森永の松崎半三郎の説明を紹介してみたい。

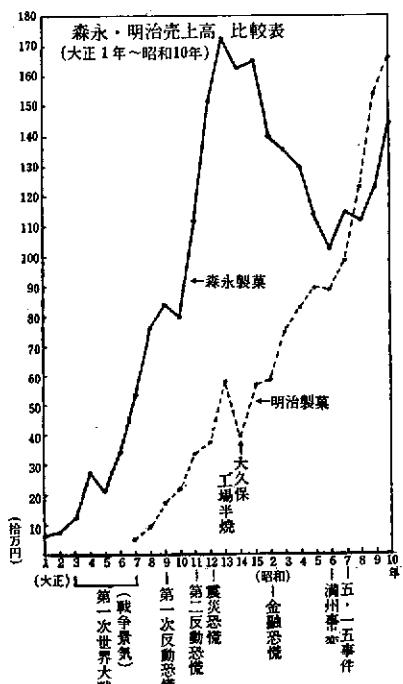
「この東京菓子というのは信厚会（東京の森永特約店の団体）の有力なメンバーであつて、のちに今村製菓（大正七年創立・資本金百万円）の社長となつた今村太平次氏の発起にかかつたもので、今村氏が大丸鉄太郎氏、伊藤一二氏と組んで設立をみたものである。大丸氏は元農林省技師で大日本人造肥料の専務をやつていた人で実業界の名士に知己が多く、従つて東

京菓子の重役株主中には菓子業界の人よりはむしろ他の実業家浜口吉兵衛、若尾璋八、大橋新太郎、馬越恭平、和田豊治氏等諸氏の顔ぶれがみられた。この子会社は間もなく明治製糖の子会社として設立された大正製菓と合併し、東京菓子の名称で経営が行われたが、資本及び経営の実権は明治製糖の掌握するところとなつた。その後東京菓子は重役を入れ替え、相馬半治氏（明糖社長）自ら社長となつて名実共に明治系の子会社となり、名称も現在の明治製菓と改められたのである」と。

まことに核心を掘んだ表現であるが、ここで明かにされているように、一つの設立のねらいは明糖の二次加工部門への進出であつた。しかし東京菓子側のねらいは撒豆柏パンの製造にあつたのである。これは東京菓子の専務取締役となつた犬丸鉄太郎が「バラ豆柏パン類の製造を企図」したのがその発端であつたと明菓四〇年史に記載されているところからみても明らかである。当時の記録をみると、天下の鈴木商店が大豆油抽出の日産一五〇屯工場を横浜に建設したのは大正六年であつた。そこで犬丸はこの脱脂大豆を粉にまぜ、蛋白量が多くてしかも廉価なパンを売り出して一儲けしようと企てたのであろう。鈴木商店も大豆粕が肥料でなくて人間の食糧となれば採算もよいにきまつているから、きっと犬丸のプランを支持したにちがいない。こうして多くの財界人が犬丸の事業に投資することになったのだと推測される。翌七年の米そうどう當時、九十パンの田辺玄平が田尻東京市長に貧乏人は鳩豆飯をくえと説き、田尻市長がこれを熱心に宣伝したのも、そのころ大豆粕の利用が各方面から注目されていたことの証拠であるが、それはともかくとして森永製菓の間屋、信厚会の旗頭であつた今村太平次が東京菓子設立の発頭人であつたことは、何といつても森永にとって一大ショックであつた。当時森永の支配人であつた松崎半三郎が、そんな不信行為をされてはこまると怒つたのは当然であつたといわなくてはならない。

しかし問屋はどこの製品でも扱うのが商売ですよと云われればどうしようもない。そこで松崎は考えた。こんな反覆常なき問屋を販売網としている

限り、メーカーはいつも不安定な生産に追われることになると。肚をきめて問屋団体の信厚会と袂を分つた松崎支配人はすぐに店員を全国に派遣して、中央問屋の下部組織になつてた地方問屋とメーカーが直結する二た。すると地方問屋はすべて双手を挙げて森永との直接取引を歓迎したのである。それは中央の大卸をぬきにして地方問屋とメーカーが直結する二とは双方にとつてのプラスだからであるが、こうして森永は大卸ぬきの独自の販売網を形成していく。そして大正十一年にはこれらの地方販売会社を打つて一丸とした森永製品販売会社が誕生した。これが森永商事の前身であるが、森永が大をなした原因の一つはこうして松崎支配人が転職為福（てんかいふく）の手を打つたことにあるから、森永に大をなさしめたのは信厚会とそれをあやつた明治製菓であつたということもできよう。世の中といふものは皮肉なものである。



それはともかくとして大正製菓は、大正六年の暮から竣工した大久保工場の製品を売りはじめた。しかし資本力はあつても菓子については素人であるから仲々思うようにいかないし、戦後反動恐慌の影響などもあつて売り上げも伸びない。そうなると寄り合い世帯の会社だから内部もごたつてはならない。そこで松崎は考えた。こんな反覆常なき問屋を販売網としている

取締役会長に就任、企業の刷新にのりだしたのである。

相馬会長が明糖の子会社らしく明治製菓と社名を変更したのは翌大正十三年の九月であったが、彼はそれと同時に明糖川崎工場の隣接地に一大製菓工場を建設、手狭な大久保工場を廃止した。

これによつてようやく軌道にのつてきた明治製菓の売り上げが、ライバルの森永製菓のそれを追い越したのは昭和八年だつたことは前述の通りであるが、両社の売り上げの伸びをグラフによつて示せば別表の通りである。なおもう一つのグラフは森永製菓の利益の増大減滅を示すグラフであるが、これをみると同社の利益が急速に伸びはじめたのは、世界大戦のはじまつた大正三年の下半期からであり、それが更により高度の成長に轉じたのは米そうどうの前年にあたる大正六年の下半期から大正九年の上半期にかけてであつた。

しかしその九年下半期から十二年の上半期までの利益は急減している。それが第一次及び第二次反動恐慌の影響であることはいうまでもないが、震災を契機として同社の利益は再び急増に転じた。それはドル箱の鶴見工場が罹災を免れたからである。

ところが大正十四年の森永の利益は急減している。これは森永のドライミルク減量事件なるものが大阪でおこり、大朝・大毎などによつて集中的に攻撃されたからであつた。この事件の真相について松崎半三郎は次の通り語つている。

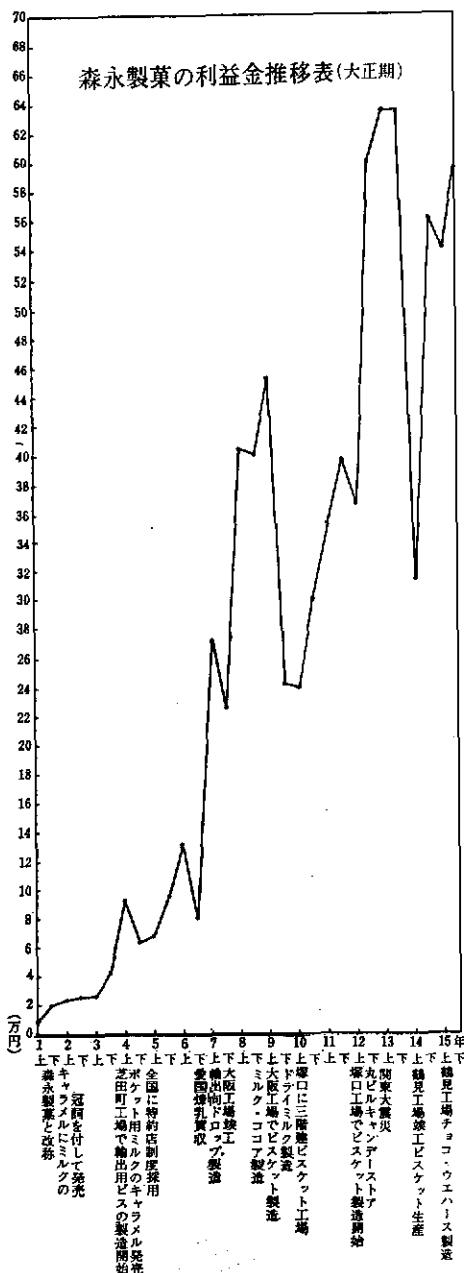
「これはどうして起つたかというと、ドライミルク技術が熟練するに付けて仕上りが軽くなるのであるが、これに気が付かず缶一杯つめれば間違いないがないという風に安心していたのがまちがいのもとで、事実は製品は缶一杯つまついても規定の目方には足りないことが起つていてのであつてこれに気付かずドンドン製品を出していたことも迂闊といえは迂闊であつた」と。

正にその通りであるが、こうした一寸した不注意から会社の運命を左右するような大きさわぎがおこつたのである。当時この事件でいたでをうけた森永は再起不可能とまで経済雑誌で酷評された。しかし松崎はこれにくぢけず冷静に局面の打開をはかつた。

その第一は丸ビル本社を田町工場の片隅に移したことであり、第二は重役の賞与辞退と幹部社員の減給であつた。こうして全員火の玉となつて奮闘した結果間もなく経営は好転したのであるが、商法に関する限り松崎はあくまで積極

政策をとつた。これが成功した原因の一つは経済状勢の好転にあつたが、それはともかくとしてこの森永の経験はかみしめて味うべき値打ちがある。

それはそれとしてこの森永の利益表でもわかるように、パン・菓子業界にとつての販



金時代は大正四年から戦後第二次反動恐慌の起点となつた大正九年三月十五日までであつた。

以上は大正時代の森永・明治のあゆみであるが、この大正時代に誕生した洋乾菓子業者のうちいまも健在を誇つてるのは明治・森永の両社と株式会社江崎だけである。

江崎利一が弟の清六と協同して大阪で菓子屋を開業したのは大正十年の暮であつたが、彼は翌十二年二月一日の紀元節をトとして「栄養菓子グリコ」と銘打つた新聞廣告をだした。このグリコはやがて「一粒三〇〇メートルのグリコ」として全日本の子供たちの人気的となつたが、この全文仮名書きの豆廣告は新しい廣告のアイデアとして出色のものであつた。

これに氣をよくした江崎は、さらには幼年者の人気とりとしてグリコにおまけとして玩具の景品をつけたが、これまたおまけのグリコとして人気が沸騰し、模倣者が続出した。大正時代の思い出として江崎のグリコと佐久間式ドロップスの名は光芒を放つてゐる。

第十八節 高級洋生店の登場

大正年間に洋乾菓子（クツキー）部門がベーカリーから分離独立して独自の産業として成長、森永、明治の両社を主軸として発展していったことは前節記載の通りであるが、大正初頭には洋菓子専門店は殆んどなく、大部分はベーカリーの兼業であつた。それがカフェーまたは喫茶店を兼ねた高級洋菓子店として次第に新生面を拓いていったのは大正時代の末期である。そしてそうした風潮の先頭に立つたのは明治四十三年創業の不二家であつた。横浜の繁華街元町に開店した不二家が、アメリカに渡つて彼の地の喫茶店経営をまなび、その店舗をノーダフアントンとして、セルフサービス方式を取り入れたのは大正二年のことだが、この洋風喫茶店が爆發的繁昌の段階に入つたのは大戰景気が最高潮に達した大正七、八年であつた。これに勢を得た不二家は同十一年に横浜第一の繁華街伊勢崎町に進出、次いで翌十二年には東京銀座に進出した。

関東大震災で三店悉く焼失したが、大正十三年には銀座と伊勢崎町店が復興した。大都会においしいコーヒーと紅茶、ココアと高級洋菓子をそろえた喫茶店ブームが起つたのは大正の末年から昭和初頭にかけてであつたが、それはベーカリーと高級洋菓子店の分解でもあつたのである。

そんなわけで異国情緒の横溢（おういつ）した横浜の元町からまず高級洋菓子専門店が生れ、それが横浜の繁華街伊勢崎町を経て東京の銀座に進出したことは、歴史的にみて意味深い現象であるが、高級洋菓子店として有名なコロンバンが東京大森にパリーコロンバンの支店を開設したのは大震災翌年の大正十三年であつた。巴里のコロンバンで腕を磨いた店主門倉国輝氏が、東京へ持ちこんだのは純フランス式のケーキとカフェーであつた。その門倉氏が大森から銀座六丁目に進出したのは昭和六年であつたが銀座コロンバンが当時の芸術家やモガ・モボたちに愛好されたのはその店にパリームードが横溢していたからであつた。

また明治屋が銀座尾張町にドイツ人のカール・ユーハイム夫妻を招いて株式会社ユーロップを創立、江戸ツ子に純ドイツ風ケーキを出す喫茶店を開設したのは大正八年のことである。當時は戦後景気はなやかなりし時代であつた。この新趣向は銀座マンに大いに歓迎されたので、夫妻はすつかり気をよくして日本永住を決意、大正十二年には妻君のエリーゼが横浜に高級洋菓子舗を開いた。しかし関東大震災で地震のおそろしさをいやといふほど知らされた夫妻は、すぐに神戸に店を移してここを拠点とした。

この一例でもわかるように、震災を契機として横浜の外人は大挙して神戸に移つたのであるが、これは神戸の西洋文化普及拠点としての役割が増大したということに外ならない。

以上は大正時代の洋菓子専門店初期の歴史の一端であるが、念のために洋乾菓子界の森永・明治に相当する不二家とコロンバンの草創期の略年譜を示せば次の通りである。

初期の不二家年譜

年次別	月	事項
明治四三年	秋	藤井林右衛門横浜市中区元町二丁目に不二家洋菓子店を開く
大正元年	九	藤井渡米して日給二ドルのアルバイトをしながら洋菓子、喫茶店の研究を行い、翌年の夏帰国する
大正二年	八一	店舗を改装してアメリカ式ソーダファウンテンとしセルフサービス方式と金銭登録器をとりいれる
大正七年	八	大戦景気を反映して店大いに繁昌、いちはやくイーストパンを焼いて人気を集めること
大正十一年	一	横浜市中区伊勢佐木町に支店を開設する
大正十二年	九	東京の銀座六丁目（当時の尾張町二丁目）二番地、（いまの小松ストアの場所）に進出、三階建の高級喫茶店を開設する。
大正十三年	一	関東大震災で三店悉く灰燼に帰する。
昭和初頭		品川の仮住居を拠点として菓子パンの行商などで復興を、いそぎこの年銀座店と伊勢佐木町店を復興する思い切った事業の拡張にのりだして行く
初期の銀座コロンバン略年譜		
年次別	事項	項目
大正十年	事	

大正十一年	帰国して銀座東洋軒店に入る
大正十二年	関東大震災で銀座店罹災する
大正十三年	独立して大田区大森入新井にパリーコロンバン日本支店を開店する
昭和三年	銀座六丁目角に銀座コロンバンを開設する
昭和六年	終戦後銀座七丁目にうつり、東京都内、大阪、神戸、青森等に再渡仏
その後	次々に支店をもつ
大正十一年	◇：洋生菓子専門店の略史
安政六年（一八五九）開港の横浜にイギリス人経営の横浜ベーカリーが誕生したのは文久三年（一八六三）であった。それから次々に異人経営のベーカリーが誕生したことは既に言及しきであるが、その横浜にフランス人経営の洋菓子専門店が出現したのは明治七年（一八七四）のことだった。この年はフランス系瑞西（スイス）人チャリエスが東京築地の居留地にベーカリーのチャリエスを開業した年であるが、同じ七年に東京千代田区麹町山元町に宮内省大膳寮奉仕の村上光保が洋菓子専門の開進堂を開業した。これが日本人経営洋生菓子専門店第一号であるが、当時は妻モト名義であり、光保が大膳寮を辞して洋菓子に専念したのは明治十二年であつた。この村上と同じ横浜の西洋人経営の店で洋菓子技術をまんだ藤田武次郎が東京芝区愛宕町で壺屋を開業したのもこのころであり、嵐月堂が洋菓子に力を入れだしたものこのころである。	
大正十一年	東洋軒の東京俱楽部で働いていた門倉国輝氏はこの年渡欧してパリーの有名菓子店コロンバンに入店、フランスケーキの製法と店の経営を見習う

松堂（柴田石松）が横浜で開いた洋菓子専門店だという説もある。滯米十一年の森永太一郎が帰京して赤坂区溜池一番地で西洋菓子製造所を開いたのはその翌年の明治三十二年であったが、彼は間もなく洋生から洋乾菓子の卸屋にかわつていった。

そんなわけで洋生中心の洋菓子専門店は容易に成立せず、洋菓子、殊に洋生類はベーカリー乃至和菓子屋の兼業時代が長く続いた。ところが明治も末の四十三年に横浜の外人街元町の一角に洋菓子と喫茶専門の不二家が出現して新時代を劃することになったのである。しかし「不二家五十年の歩み」によると、元町の店の初期の客の大半は横浜在留の外人たちであった。それが質的にかわつたのは不二家が大正十一年に横浜伊勢崎町店を出してからで、この店の客の大半は日本人のハイカラ連であつたといふ。そんなわけでわざわざ横浜まで出かけていく東京の文化人のために、不二家が銀座店を出したのは大正十二年であるから、だいたい震災前ごろから洋菓子と喫茶の店が成立する経済的基盤が出来上つたとみてよさそうである。

◇カフェー・喫茶店の略史

洋風喫茶店の第一号は明治十九年に東京日本橋小網町に誕生した洗愁亭だらうとの説もあるが、一般的には明治二十一年四月十三日東京上野公園前の下谷黒門町に開店した可否（コーヒー）茶館だといわれている。この店主鄭永慶（ていえいけい）はアメリカのエール大学にまなんだチャヤキチヤキのインテリで、この茶館を私設社交クラブにしようという抱負で発足した。それでコーヒー一杯一銭五厘、牛乳一銭というたてまえをとり、西洋風の遊戯室まで設けたりづばなものであつた。その開業広告文には「当（まさ）ニ貴重セラルベキ大務（タイム）（Time）ヲ空過セシメザル為ニ、内外ノ新聞、雑誌類、東西官許ノ賭具、和漢洋ノ書籍及ビ書画ヲ置キ」云々とあるが、ここではむろん洋菓子も出せば紅茶も出した。しかし時運にめぐまれず、遂にこの店は数年後にその姿を消してしまつた。

それは欧化風潮が天下を風靡した鹿鳴館時代が終つて、逆に国粹風潮が

勢を得たからであろう。明治二十三年五月浅草に出現したダイヤモンド珈琲店も短命で終つてゐるところからみての推察であるが、この推察には根拠がある。

それは明治二十一年のコーヒーラン高六〇、六三七キロを頂点としてコヒーの輸入量が激減しているからで、この実績が破られたのは日清戦役後の明治二十八年だつたからである。

日清、日露両戦役に勝つた日本には再び欧化風潮が押し寄せた。そこで明治三十九年になると、こんどは銀座六丁目に台湾産の紅茶を宣伝するのがねらいであつたが、遂に成功しなかつた。

その後の明治二十八年だつたからである。

本橋小網町に開店した「メーヴン鴻の巣」銀座日吉町に開店した「カフェー・ブランタン」銀座鍋町に開店した「カフェー・パウリスター」同じく銀座尾張町に開店した「カフェー・ライオン」などであつた。

そしてこれらの洋風喫茶店は、こんどは潰れることなくグングンと伸びていつたのである。そういう点からいつてこの明治四十三年という年は洋風喫茶店史をかざる画期的な年であるが、この年は日韓合邦が断行され、幸徳秋水一派の例の大逆事件の検挙をキッカケとして、あらゆる進歩的思想に大弾圧が下された年でもあつた。こうした反動的風潮の抬頭に暗い感じをもつた青年層が、その憂いをまぎらすために喫茶店に足をはこぶようになり、それがこの新しい商売の発展に役立つたことはこの年の六月十五日（幸徳一派検挙の直後）に詩人石川啄木が書いた次の詩からも察することができる。

ココアのひと匙
(石川啄木作)

われは知るテロリストの
かなしきこころ——

ことばとおこないとを分ちがたき
ただ一つのこころを

奪われたことばかりに

行ないをもて語らんとするところを

われとわがからだを敵に投げつくる心を——

しかしてそはまじめにして熱心なる人の

常にもつかなしみなり

果てしなき議論ののちの

冷さめたるココアのひと匙をすすりて

そのうすにがき舌ざわりに

われは知る

テロリストの

かなしき、悲しきこころを——

ここで無視し得ないのはカフェー・パウリスタの果した歴史的役割である。この店は明治三十七年に皇國移民会社を起こしてブラジル移民につくした水野竜経営の店であるが、ブラジル政府はこの先覚者のために毎年一五〇〇俵（六〇キロ）のコーヒーを供与し、東洋におけるブラジルコーヒーの一手販売権を与えたのである。

そんなわけでこの店は一杯五銭という安くておいしいブラジルコーヒーとケーリーの専門店であったが、水野はここを拠点として東京八カ所、横浜大阪二カ所、京都、神戸、長崎に各一カ所の店を出すことにしていた。この点がこの店の特殊なところであるが、他のカフェでは粒よりのウエートレス（女給）をそろえて洋酒も出した。元来カフェーというのはコーヒーとケーリーだけの店で酒を出さないのがたてまえである。パウリスターはその本筋をまもつていたが、他はそうでもなかつた。この意味でパウリスターは本格派喫茶店のモデルであったが、大正三年上野公園で開かれた平和博覽會ではブラジル政府が大々的なコーヒー宣伝を行なつた。それから大戦景氣が出てコーヒー、紅茶、ココアをのませる喫茶店続出という時代が来たのであるが、水野竜が大正二年から同十二年までに輸入したコーヒーは合

計二万俵に達したという。

◇：紅茶とココアの略史

内務省勧業寮が紅茶係かりを設けて国産紅茶の奨励をはじめたのは明治七年であつたが、それは輸出がねらいであつた。しかしそれは本場ものに押されて仲々うまくいかなかつた。だが大正六年になると静岡に日本紅茶株式会社が発足している。しかしそれも永続きしなかつた。次いで大正十四年には森永製菓が烏竜（ウーロン）紅茶を売り出し、昭和初頭になると

「三井紅茶」（日東紅茶の前身）「森永紅茶」「明治紅茶」が相次いで売り出されるようになつた。

一方飲料用のココアの輸入がはじまつたのは明治の末年であつた。啄木が前述のココアの一サジを書いたのは明治四十三年であるが、当時はまだ大変めづらしい飲料だつたのだろう。カカオ豆からココアをつくることが国内ではじまつたのは大正八年であり、それをはじめたのは森永製菓であった。翌九年には明治製菓もこれに倣つている。こうして洋生とコーヒー紅茶、ココアの洋風喫茶店が続出するようになつたのは関東大震災直後からであつた。

第二十節 ベーカリーと洋生屋への分解

以上はベーカリーの洋生兼業時代が終つて、洋生専門店の出現を見るに至つた背景の略史であるが、ここでもう少し生パン屋と洋生屋の分業体制が進んでいった事情にメスをあててみたい。

この点を知るためにもう一度不二家の成長過程を振りかえつてみる必要がある。なぜならば不二家の歴史を掘り下げるによつて一番よく問題の核心を捉えることができるからである。

不二屋の開祖藤井林右衛門は、明治十八年愛知県平野村（いまの名古屋構内）の農家に生れた。父は岩田林七といい、彼はその四男二女の末つ子であつたが、六つのとき鉄道職員藤井善弥の養子となつた。その藤井が横浜の銅鉄商杉浦商店に奉公したのは十六才の春であつたが、ひよんなこと

から彼は店主の末妹(まつまい)まさと縁組してこの店の経営を引受けける羽目になつた。しかし彼はかけひきの多い銅商鉄が性格的に自分に向きだつて、転業をねらつていた。それが洋菓子屋として再発足することになつたのは、フランス人の店で洋菓子の腕をみがいた達さんという職人と知り合つたのがキッカケであつたが、とまれこうして山の手の外人住宅街の玄関口にあたる元町に店をもつたのは明治四十三年のことだつた。彼は後年「うちが成功したのは自分に合う商売をして、人より早くいいところに店を出してうちの商売がちょうど時勢に合つたからです」と語つてゐるがこれは事実である。

さて元町といえば、お得意の大半は岡の上の異人さん相手の街である。

それでは当時の異人の生活はどうだつたかであるが、「不二家五十年の歩み」はこの点に次の通り言及している。

「そのころ横浜に居留していた外人の生活程度は日本人に較べてはるかに高く、自分の家毎にコツクを抱え、ケーキもそれぞれの家で焼いていた。だから横浜で外人層をねらつて成功するためには、まずそのような自給自足の体勢をくずして菓子は専門店でという慣習をつくるというところを持つて行く必要がある」と。

正にその通りだつたろうが、それには品質、価格、種類などすべての点で抜群のものでなければならぬ。そこで藤井は一流主義をとり材料のよいものを揃え値段も思い切つて勉強したし、売れのこりを翌日販売にまわすことも絶対にしなかつた。しかしそれでも仲々客はつかない。そこで彼は本場の模様を知るために渡米を決心、英語塾にかよつて語学をまなび大正元年に渡米、約十ヵ月間アルバイトをしながら現地の商法を体験した。その結果について藤井はこういつてゐる。

「大きな収穫は洋菓子喫茶の将来性に十分な自信を得てきました。もし私がこの冒険にも似た渡米をしなかつたとしたら、その後の事業の進展速度は大変にぶかつたことでしよう」と。

大正二年に帰国した藤井はアメリカでの経験を生かして店の大改造を行

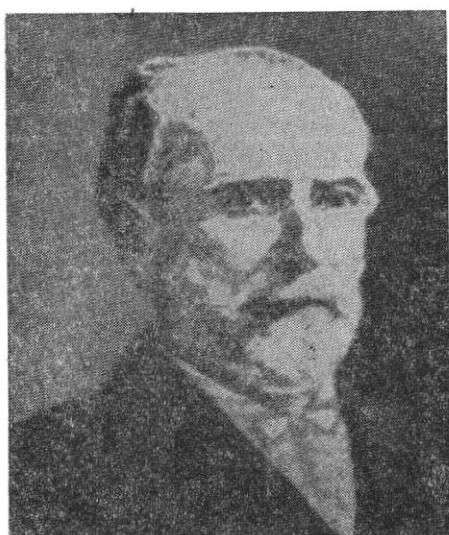
い、セルフサービス方式のソーダファウンテンにした。丁度そのころ第二次大戦がおり、横浜の外人街も日毎に活気づいて行き、店の経営もよくなつたが、外人といつてもその国籍は多岐に亘つてゐる。それですべての外人の趣味嗜好を満足させるのはよういでない。そこで彼は港に出入りするフランス人や歐州航路のチーフベーカーなどから新知識をとりいれると共に、アメリカの雑誌からも学ぶことを怠らなかつた。またロシヤ革命の結果、亡命してきた白系露人を雇い入れて品質の向上と商品の多様化につめた。こうして次第に不二家のケーキは品質が向上し、種類も多様化してベーカリーの片手間仕事のケーキとは格差の大きい店になつていつたのである。

彼が如何に進歩的な商法をやつたかについて一例をあげると、生イーストパンをまつさきにとりあげたことである。

「丁度そのころ一大正十年ごろ—フライシュマンのイースト製パン法が紹介され、その輸入の道が拓けた。不二家はどこの店より先にこれを採用して味のちがつたパンを売り出そとねらつた。そのため信用のおける中國人の職人が技術者として迎えられた。ホップスによつたパンは、売れ残りの翌日販売もき

いたが、イースト法のものはそうはいかない。そこにむづかしい問題があつたが、林右衛門は勇敢に新しい方式を採用した」

これは不二家史にある記事の一部であるが、このように彼は新しいもの



チャーチス・フライシュマン

は何でもとりあげた。

こうして品質においても種類においても、經營法においても他の同業者の追徳を許さぬ不二一家が形成されていったのである。かくして外人客の信頼を確保した藤井は大正十一年に伊勢崎町支店を開設して、浜つ子に呼びかけ、それに成功すると翌年銀座に進出すると、快挙をやつてのけたのであつて、彼が専門店として成功した原因をふりかえつてみると、第一は難攻不落とみえた外人層に挑んだことであり、第二は大戦景気という時勢にめぐまれたことであり、第三は店の場所の選定がよかつたことであり、第四はその一流主義を押し通したことであつた。

こうなるともう片手間仕事のベーカリーのケーキなど不二家の敵ではない。こうしてパンはパン屋で、洋生は洋生屋で、洋風の乾菓子は大量生産方式でという分業体制が次第に形成されていったのである。

第二十一節 マーガリン工業の抬頭

大正年代に新しい製パン副原料として登場したものの一つにマーガリンがある。これは主としてラードの代替品として使われたが、何よりの長所はこの人造バターが天然バターよりもはるかに割安だということだった。製パンにマーガリンを大々的にとりいれるようになつたのは、第二次大戦後の物資欠乏時代以後のことである。はじめはビスケットや中生パンなどに使われたものである。これが次第にパンにも使われるようになつたのは、第一次大戦後の反動恐慌から昭和初頭の世界経済恐慌時代に製パン原価の切り下げが切実な問題とされたことに因るが、ここで少しばかりマーガリンの歴史に言及すると、あらまし以下の通りである。

マーガリンが開発されたのは十九世紀の終りごろであった。当時ヨーロッパではバターが極端に不足していたので、フランスのナポレオン三世はこの不足を開拓する方法について懸賞募集をおこなつたのであるが、フランスの化学者メージュ・ムリエがこれにこたえて人造バターをつくつた。彼は牛脂の軟質部分であるオレオオイルを牛乳で乳化し、これを冷却してバター様の油脂をつくつたのであるが、彼はこれに真珠を意味する「マガ

ライト」の名をとつてマーガリンと命名したといわれている。

このマーガリンがナポレオン三世の懸賞に当選したのは一八七〇年（明治三）であつたが、その前年にはドイツとイギリスで特許をとつてゐる。普仏戦争は明治三年の七月から翌年にかけて斗われたので、ナポレオン三世は急速この新発明を応用したが、戦局好転せず七年（明治四）九月にはフランスの王制が終りを告げて第三共和制が生れ、翌年にはパリーコンミューーンの乱がおこつてゐる。

それはともかくとして、このマーガリンは発明国のフランスでは内乱のためにあまり伸びず、隣接のオランダとデンマークで工業化された。これがアメリカに渡つたのは発明から五年後の一八七四年（明治七）であるが横浜に初輸入されたのはそれからさらに十四年後の明治二十年であつた。しかしこれがわが国人によつてつくられるようになったのはそれから二十二年後の明治四十一年であつた。発明者は山口八十八という栃木県人で、彼は横浜の親類である貿易商で働いていたうちこのマーガリンを知り、これを国産することを立つた。たまたま在留オランダ人から工場の設計図を入手することができたので、これによつて研究をつけた。その結果、国産マーガリンが完成したのが前記の明治四十一年であつたが、彼はこの成功に氣をよくして帝国社という会社をつくり、茲に生産の第一歩をふみだすことになつたのである。後年彼はマーガリン業者団体の初代会長に推おされ、さらに産業功労者として藍綬褒章をうけたが、さてこうして舶来と国産のマーガリンが出廻るようになると、それが天然バターと混同されいろいろ不都合なことが起つた。そこで大正三年五月一日付をもつて農商務省令第十二号が公布され、マーガリンを人造バターと表示することができた。

帝国社についてマーガリンの製造をはじめたのは三和食品（大正八）ホシ産業（大正九）丸和油脂（大正一二）であつたが、パン業界ではまづ半生パンにこれが使われるようになつた。そして次第に生パンにも使われるようになつたが、それはすべて昭和時代になつてからのことである。